次郎　それ、引いた。引いた。エンヤラサア。
六郎　（上のかたを見て。）それ、引いて來る。早くしろ、早くしろ。
（助十は上のかたへ駈けてゆく。權三とおかんもかけ出してゆく。やがて上のかたより以前の如く、雲晉、顯晉が先に立ち、長屋の男二人と子供ひとりが網をひいて出づ。助十と權三とおかんも網をひいてゐる。この時、下のかたの路地口より小間物屋彦三郎、廿歳ぐらゐの若者、旅すがたにて出づ。）
助十　さあ、さあ、引け、引け。
權三　引いたり、引いたり。
一同　エンヤラサア。
（彦三郎は網をひく人々を避けながら來るうちに、助十に突きあたる。）
助十　えゝ、なにをしやあがる。
（助十に突き退けられて、彦三郎はよろめきながら更に權三に突きあたる。）
權三　この野郎、邪魔な奴だ。
（權三に蹴られて、彦三郎はつまづき倒れる。水の音。一同は見返りもせずに、網をひいて上のかたへ引返して去る。）
六郎　これ、これ、手荒いことをするな。（彦三郎を介抱する。）もし、飛んだ失禮をいたしました。
彦三郎　お江戸馴れませぬ者がお取込みのなかへ出まして、わたくしこそ飛んだお邪魔をいたして相濟みません。
六郎　いや、お若いにも似合はず御丁寧の御挨拶で、重々痛み入りました。御覽の通り、けふはこの長屋の井戸換で混雜してゐるところへ、丁度におまへさんがお出でなすつたので、どうもお氣の毒なことを致しました。店子に代つて家主のわたしがお詫をしますから、どうぞ料簡して遣つてください。おゝ、おゝ、泥だらけになつた。（手拭で彦三郎の膝のあたりを拭いてやる。）
彦三郎　いえ、おかまひ下さりますな。では、おまへ樣がこのお家主樣でございますか。
六郎　はい、はい。こゝは神田の橋本町、その長屋をあづかつてゐる家主の六郎兵衛でございますよ。
彦三郎　おゝ、左樣でございましたか。
（この時、以前の長屋の女房と娘、その次に助八と長屋の男三人、與助と子供ふたりが網をひいて出づ。）
助八　（彦三郎に。）えゝ、なにをぼんやり突つ立つてゐやあ

がるのだ。この案山子野郎め。邪魔だ、邪魔だ。
六郎　よそのお方に失禮をするな。おまへの方でよけて行け。馬鹿野郎め。
助八　又叱られたか。
（水の音。人々はわやゝ〳〵云ひながら上の方へ引返して去る。）
六郎　こゝらの長屋にゐる者は我殺な奴等ばかり揃つてゐるので、他國のお方にはお恥かしうございます。して、おまへさんはどなたをたづねてお出でなすつた。
彦三郎　お家主樣をおたづね申してまゐりました。
六郎　なに、わたしを尋ねて來た……。いや、それは、それは……。では、まあこゝへおかけなさい。
（六郎兵衛は先に立ちて、權三の家の縁に腰をかける。）
六郎　して、おまへさんはどこのお人だね。
彦三郎　大坂からまゐりました。
六郎　大坂からわたしを尋ねて……。では、もしや彦兵衛さんの……。
彦三郎　はい。わたくしはこのお長屋で長年お世話樣になりました小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者でございます。
六郎　あゝ、彦兵衛さんの息子かえ。（急に御色を變らせる。）
彦三郎　（これも顔を變らせる。）もし、お家主樣。父の彦兵衛はまつたく空死いたしたのでございますか。
六郎　いや、どうもお氣の毒なことで、今更なんとも云ひやうがない。手紙にも書いてあげた通り、彦兵衛さんは去年の暮にお召捕になつて、その御吟味中に病氣が出て、この三月に……。（鼻を詰まらせる。）たうとう御牢内で歿りましたよ。
彦三郎　その節は色々御厄介になりまして、お禮の申上げやうもございません。ことに有難うございました。（涙ながらに手をつく。）御手紙によりますと、父は馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隱居所へ忍び込み、六十三歳になる女隱居を殺害して、金百兩をうばひ取つたと申すことでございますが、それは本當でございますか。
六郎　（氣の毒さうに。）さあ、彦兵衛さんに限つてそんな事のあらう筈はないと思つてゐたが、御奉行所の厳しいお調べで本人はたうとう白狀したと云ひますよ。
（上のかたより權三はぶら〳〵出で來り、この樣をみて少し躊躇し、やがて抜足をして家のうしろを廻り、下の

かたの柳の下に立つて聽いてゐる。)

彦三郎　それがどうしても本當とは思はれません。わたくしの父は盜みを働くやうな、まして人を殺して金をぬすむやうな、そんな不義非道の人間ではございません。あまりに御吟味がきびしいので、身におぼえのないことを申立てたのかも知れません。(だん〳〵激して來る。)もし、おまへ樣。いづれにしてもこれは何かの間違ひに相違ございません。屹と何かの間違ひでございます。

六郎　息子のおまへさんがさう思ひつめるのも無理はないが、この一件は南の町奉行所のお係りで、お役人は名奉行ときこえてゐる大岡越前守樣だ。そのお捌きで落着したことだから、決して間違ひのあらう筈はないのだ。

彦三郎　さきほどは御吟味中と仰しやりましたが、それではもう落着いたしたのでございますか。

六郎　實は本人の白狀で事件は落着、そのお仕置は獄門ときまつた時に、彦兵衛さんは牢死したのだ。もう何と云つても仕方がない。せめてその死骸を引取つてやりたいと思つて、色々お願ひ申してみたが、重罪人であるから死骸を下げ渡すことは相成らぬといふので、殘念ながらどうすることも出來なかつたのだ。必ず惡く思はないで下さい。

彦三郎　情ないことでございますな。(泣く。)

(このあひだに、上のかたよりおかん出づ。權三は眼で招けば、おかんも竊と家のうしろをまはつてゆく。權三は何かさゝやけば、おかんは首肯いて、再び下のかたより自分の家のうしろへ廻つてゆく。權三は助十の家の緣に腰をかける。)

彦三郎　(眼をふいて。)いくら名奉行でも、大岡樣でも、このお捌きは屹と間違つて居ります。わたくしの父にかぎりまして、決してそんなことはない筈でございます。どう考へても、それはお奉行樣のお眼違ひでございます。

六郎　(なだめるやうに。)まあ、まあ、落着いて物を云ひなさい。今更おまへが何と云つたところで、お捌きも濟み、本人も死んでしまつたものを、何うにも仕樣やあるまいではないか。

彦三郎　勿論唯今となりましては、たとひ何と申したところで死んだ父が生き返るわけではございません。それはよんどころない不運と諦めも致しませうが、せめては無實の罪といふことをお上へ申立てまして、父彦兵衛の惡名を清めたうございます。お家主樣。わたくしが一生の

おねがひでございますから、どうぞお力添へをねがひます。御承知の通り、父は大坂生れ、わたくしも御當地は初めてゝ、右を見ても左を見ても、誰ひとり親みになる人はございません。もし、お家主樣。(手をあはせる。)お願ひでございます。お願ひでございます。

六郎　あゝ、そんなことを云つて泣かせてくれるな。(眼をふく。)折角のおまへの親みだ。わたしも何うかして遣りたいのは山々だが、こればかりはどうも困つたな。(かんがへてゐる。)

(このあひだに、家の奥よりおかんがそつと出で、そこにある團扇を把つて、氣のつかぬやうに六郎兵衛と彦三郎を煽いでゐる。上のかたより助十は汗をふきながら出づ。)

助十　あゝ、あつい、暑い。

權三　(小聲で。)おい、おい。

助十　なんだ。

(權三は彦三郎を指さして眼で知らせれば、助十もうなづいて、竊と家のうしろを廻つてゆく。)

彦三郎　もし、心ばかりは廻つても、わたくしは若年者、殊に御當地の勝手は知れず、なんとも致方がございません。おまへ樣によい御分別はございますまいか。

六郎　まあ、待つてくれ。わたしも頻りに考へてゐるのだが、これはなか〳〵むづかしい。

彦三郎　むづかしいと申しても、どうしても此儘では濟まされません。大坂を立ちます時にも、お父さんに限つてそんなことのあらう筈がないから、わたしがどんな難儀をしても、屹とお父さんの無實を訴へて來ると、母や弟にも立派に約束して參つたのでございます。

六郎　さうやかましく云はれると、氣が散つてならない。まあ靜にして考へさせてくれなければいけない。

彦三郎　(せいて。)このまゝのめ〳〵と戻りましては、母にも弟にも會はす顏がございません。わたくしを生かすも殺すも、おまへ樣のお心一つでございます。

六郎　むゝ、判つた、判つた。よく判つてゐます。それだからわたしも色々に工夫を凝してゐるのだ。(上の方に向つて。)おい、おい。そつちの井戸がへも少し待つてくれ。さう〳〵しいと、どうも好い智慧が出ない。

(六郎兵衛は又かんがへてゐるを、彦三郎は待ち兼ねるやうに眺めてゐる。おかんは貰ひ泣の眼をふいてゐる。)

權三　(小聲で。)どうだい。いつそ思ひ切つて云つてみよう

か。

助十　だが、あぶねえ。うつかりした事を云つて、飛んだ係り合ひになると詰らねえぜ。

樓三　それもさうだが……。（考へる。）大屋さんも困つてゐるやうだ。第一あの若けえのが可哀さうぢやあねえか。

助十　おれも可哀さうだとは思ふのだが、なにしろほかの事と違ふからな。一つ間違つた日にやあ、おれ達がどんな目に遭ふか判るめえぢやあねえか。よく考へてみろよ。

樓三　むゝ。（少し躊躇する。）

彦三郎　もし、お家主様。まだお考へは付きませんか。

六郎　（ため息なつく。）どうも困つたな。わたしも橋本町の六郎兵衛といへば、名主の玄關でも御奉行所の腰掛けでも、相當に幅のきく人間だが、こればかりは全く困つた。一旦お捌きの付いてしまつたものを、今更こつちからこぢ返すといふのは、つまり大岡様を相手取つて喰違をするやうなものだから、こいつは並大抵のことで行く筈がない。小間物屋彦兵衛は確に無實の罪だといふ立派な證據でもあるか、それとも第人はほかにあると云ふ確かな證人でもない限りはなあ。（腕をくむ。）

（樓三は何か云ひかけようとして起ちかゝるを、助十はあわてその袖をつかみ、まあ待てと制すれば、樓三はまた躊躇する。）

彦三郎　（堪へかねて。）では、どうしても出來ぬことだと仰しやるのでございますか。

六郎　さあ、出來ないとも限らないが、なにしろこいつは大仕事だ。わたしもこの年になるまで家主を勤めてゐるが、こんなことに出逢つたのは初めてだからな。

彦三郎　（決心して。）では、もうお願み申しますまい。わたくしは自分の思ひ通りにいたします。（起ちかゝる。）

六郎　（彦三郎の袖を捉へる。）まあ、待ちなさい。お前さんは眼の色を變へてどうする積りだ。

彦三郎　これから御奉行所へ駆込み訴します。

六郎　御奉行所へかけ込む……。それはいけない。駆込み訴へは御法度だ。

彦三郎　それはわたくしも存じて居りますが、もうかうなつたら致方がございません。どんなお咎めを受けるのも覚悟の上で、駆込み訴へをいたします。どうぞ留めずに通つて下さい。（振切つて行かうとする。）

六郎　どうして無暗に遣られるものか。飛んでもないことだ。いくら年が若いと云つて急いてはいけない。まあ、

待ちなさい。待ちなさい。

彦三郎　いや、放して下さい。放してください。

六郎　いけない、いけない。

（彦三郎は無理に振切つて行かうとするを、六郎兵衛は留める。おかんはうろ〳〵しながら樓三を手招ぎし、なんとかしろと云ふ。樓三ももう堪らなくなつて進み出で、彦三郎の前に立塞がる。）

樓三　まあ、おまへさん。待ちなせえ。

彦三郎　えゝ、どなたも邪魔をして下さるな。

（彦三郎は突きのけて行かうとするを、樓三は抱きとめる。）

樓三　邪魔をするわけぢやあねえ。おれが好い智慧を貸してやるのだ。やい、やい、助十。見てゐることはねえ。一緒に留めてくれ、留めてくれ。

おかん　（線に出る。）助さんも早く何とかおしなねえ。

（助十も決心して起つ。）

助十　（彦三郎に。）まあ、待ちなせえ。待ちなせえ。まつたくおれ達が好い智慧を貸してやるのだ。まあ、まあ、落ち着いて云ふことを聞くがいゝぜ。

樓三　まあ、おとなしくしろ、おとなしくしろ。

（樓三と助十は無理に彦三郎を元の巻さきに押戻す。）

六郎　井戸がへで汗になつたところへ、また汗をかゝされた。やれ、やれ。（汗を拭く。）そこでお前達はほんたうに好い智慧があるのか。

樓三　さう改まつて聞かれると少し困るが……。おい、助十。おめえから云へ。

助十　いや、おれはいけねえ。おれは不調から口不調法だからな。

樓三　うそをつけ。人一倍大きな聲で怒鳴りやあがる癖に……。

助十　えゝ、手前こそ矢鱈に無駄口をきくぢやあねえか。

六郎　これ、これ、そんなことを云つてゐては果てしがない。おい、樓三。先づおまへから口をきけ。

樓三　どうしてもわつしが口切りかえ。やれ、やれ。

六郎　何がやれ〳〵だ。おれが名指しでお前に聞くのだから、さあ、はつきりと云へ。

樓三　仕様がねえな。（頭をおさへる。）ちやあ、まあ聽いておくんなせえ。實はね、去年の十一月の末のことでごぜえました。（助十に。）おい、あれは愛日だつけな。

助十　さあ、おれもよくは覚えてゐねえが、なんでも二の酉

の前の晩あたりぢやなかつたかな。

權三　違えねえ、二の酉の前の晩だ。その晩の九つ過ぎでもありましたらうか、この助十とわつしとが遅い仕事から歸つて來まして、馬喰町の横町へ差しかゝると、頻かむりをした一人の野郎が天水桶で何か洗つてゐるやうでしたから、何をしてゐるのかと提灯の火で透かしてみると、そいつは着物の袖を洗つてゐるらしいのです。

六郎　むゝ。それから何うした。

權三　（助十をみかへる。）おい、おれにばかり云はせてゐねえで、手前も些としやべれよ。かうなりあ何うでお互えに係り合だ。

六郎　では、助十。そのあとを早く云へ。

助十　もし、大屋さん。うつかりした事をしやべつて、若しそれが間違ひだつた時には、どういふことになりませうね。

六郎　それは事にもよるな。その事によつて重い罪にもなれば、輕い罪にもなる。

助十　人殺しなんぞは重い方でせうね。

六郎　それは勿論のことだ。

助十　いけねえ、いけねえ。それだからおれは忌だといふのだ。權三。手前は勝手に何でもしやべれ。おらあ知らねえ、知らねえ。

權三　知らねえことがあるものか。おれと相棒をかついでゐたんぢやあねえか。

おかん　（權三に。）もし、お前さん。そんな人にかまはないで、知つてゐることがあるなら早く云つておしまひなさいよ。あたしも何だか聽きたくなつて來たからさ。

彦三郎　（すり寄る。）どうぞ早く話して下さい。

權三　たうとうおれが人身御供にあげられてしまつたか。ぢやあ、まあ話しませう。今もいふ通り、天水桶で袖を洗つてゐるだけならば、別に不思議と云ふほどのことでもねえが、そいつが光るものを持つてゐる。

六郎　光るものを持つてゐた……。それから何うした。

（人々ばすり寄つて聽く。）

權三　その光るものを水で洗つてゐたんですよ。

六郎　天水桶で袖を洗ひ、何か光るものを洗つてゐたのだな。その光る物といふのは刃物らしかつたか。

權三　どうもさうらしいやうでした。それでもその時はたゞ變な奴だと思つたばかりで通り過ぎてしまつたのですが、明る朝になつて聞いてみると、その晩馬喰町の米屋

といふ旅籠屋の隱居所で、六十幾つになる隱居婆さんが殺されて、門跡樣へ納めるとかいふ百兩の金を取られたさうで、わつしもびつくりしましたよ。

六郎　むゝ。（かんがへる。）して、その男はどんな風體で、年頃や人相は判らなかつたか。

權三　さあ、そこだ。（助十に。）おい、いゝかえ。思ひ切つて云つてしまふぜ。

助十　まあ、待つてくれ。もし、大屋さん。これから權の野郎が何を云ひ出すか知りませんが、わつしに係り合を付けねえで下さいよ。わつしはなんにも知らねえんだから……。

權三　いや、さうは行かねえ。おれと相棒でゐる以上は、どうしたつて手前もかゝり合ひだぞ。

助十　だつて、おれはなんにも云はねえ。

權三　云つても云はねえても同じことだ。

おかん　まあ、そんなことは何うでもいゝから、肝心のところを早くお云ひなさいよ。じれつたい人だねえ。

六郎　まつたくおれも焦つたい。さあ、早く云へ、早く云へ。

彦三郎　さあ、早く聞かしてください。（詰めよる。）

權三　寄つて集つておればかり虐めちやあ困るな。助の野郎め、狡い奴だ。おぼえてゐろ。

彦三郎　もし、早く云つてください。早く……早く……。

權三　云ふよ、云ふよ。かうなつたら何でも云つて聞かせるよ。その男は……年頃は三十四五で、職人のやうな風體で……。

彦三郎　職人のやうな風體でござりましたか。

助十　（權三に。）おい、おい。もうその位にして置くがいゝぜ。

六郎　やかましい、默つてゐろ。（權三に。）まだそのほかに何か目じるしは無かつたか。

權三　さあ。（躊躇する。）

六郎　（囁すやうに。）これ、權三。なぜおれの前で隱し立てをする。正直に云はないとお前の爲にならないぞ。

おかん　お前さん、なぜ隱してゐるんだねえ。をかしいぢやあないか。

權三　えゝ、もう自棄だ。みんな云つてしまへ。（少し聲をひそめて。）夜目ではあり、そいつは頬被りをしてゐたので、確なことは云へねえが、どうもそれが近所の奴らしいので……。

六郎　むゝ、近所の奴……。誰だ、誰だ。

權三（思ひ切つて。）豐島町の裏にゐる左官屋の勘太郎によく似てゐたんですよ。

おかん　まあ。あの人が……。

六郎　左官屋の勘太郎……。あいつによく似てゐたのか。これ、助十。どうでお前もかゝり合だから、正直に云はなければならないぞ。まつたく其奴は勘太郎に似てゐたのか。

助十　かうなりやあ俺ももう自棄だ。（大きな聲で。）そいつは豐島町の勘太郎、左官屋の勘太郎、たしかにあの勘太郎に相違ねえのだ。

六郎　これ、大きな聲をするなよ。

彦三郎　あゝ、ありがたい、有難い。お二人さんはわたくしに取つて神樣と云はうか、佛樣と申さうか。もし、もし、この通りでござります。（手をあはせて權三と助十を拜む。）

おかん　それにしても、お前さん達の氣が知れないぢやあないか。それほど判つてゐるならば、なぜ早くそのことを云ひ出して、彦兵衛さんの無實の災難を救つて上げなかつたんだらうねえ。

權三　そのときに氣がつけば格別だが、あとになつちやあ無證據だ。うつかりしたことが云はれるものか。どんな係り合になるかも知れねえ。

六郎　それで二人ともに默つてゐたのか。横着者にも似合はない、氣の小さい奴等だな。

おかん　彦兵衛さんに疑ひのかゝつたのは、どういふわけだかよくは知らないけれど、不斷から正直者のあの人がお縄にかゝつて通れて行かれるのを、一つ長屋内で見てゐながら、今まで默つてゐるといふことがあるものかね。お前さん達は無分別不人情だよ。

六郎　まつたく女房のいふ通りだ。せめておれだけにも内々で話して置いてくれゝば、なんとか仕樣のあつたものを……。（叱るやうに。）それほどの事を知つてゐながら、今まで口をふいて默つてゐるとは何のことだ。つまり貴樣達が彦兵衛さんを見殺しにしたやうなものだ。これ、彦三郎さん。お前さんのお父さんのかたきはこの權三と助十だ。なんの、證をいふことがあるものか。わたしが證人になつてやるから、こゝで立派にかたき討をしなさい。

（權三と助十はびつくりする。）

權三　と、とんでもねえ。なんでおれ達が仇なものか。

助十　かたきと云ふのは勘太郎だ。

權三　あの勘太郎だ。

（云ひながら二人は逃げかゝる。）

六郎　待て、待て。貴樣たちが逃げたからと云つて濟むわけのものではない。かたき討は免してやる代りに、その罪ほろぼしに彦三郎さんの味方をするか。

權三（助十と顏を見あはせる。）あい、あい。屹と味方を致します。

六郎　よし、よし。それならば仕樣がある。（上のかたに向ひて。）おい、おい。誰か來てくれ。早く來てくれ。

（上のかたより助八を先に、雲哲と順哲出づ。）

六郎　おゝ、助八。おまへの家に麻繩のやうなものは三本ほどないか。

助八　さあ、三本はどうだかな。

おかん　内にも一本ぐらゐはありましたよ。

助八　なにしろ探して來ませう。

（助八は我家に入る。おかんも奥に入る。）

雲哲　用はもうそれだけかね。

六郎　いや、おまへ達もそこにゐてくれ。まだ外にも用があるのだ。

（おかんは奥より麻繩一本持ちて出づ。）

おかん　これで間に合ひますかえ。

六郎　よし、よし。（繩をうけ取る。）

（助八も奥より麻繩二本を持ちて出づ。）

助八　大屋さん。これでいゝかね。

六郎　むゝ、これで丁度三本揃つた。

助八　そこで、これをどうしなさるのだ。

六郎　人間三人を縛るのだ。

一同　え。

權三　三人といふのは、誰と誰とを縛るんですね。

六郎　先づ貴樣を縛る。

權三　え。

六郎　それから助十を縛る。

助十　え。

六郎　それから彦三郎さんを縛る。

彦三郎　わたくしもお縄にかゝるのでござりますか。

六郎　この三人を珠數つなぎにして、南の御奉行所へ牽いて行くのだ。

助八　いけねえ、いけねえ。あとの二人はどんな惡いことを

したか知らねえが、おれの兄貴に限つちやあ縄をかけられるやうな覺えはねえ筈だ。ふだんから兄弟喧嘩こそしてゐるが、おれに取つちやあ唯つた一人の兄貴だ。いはれも無しに縄附きにされて堪るものか。なんでおれの兄貴を縛るのだ。その譯をいへ。譯をいへ。

六郎　さうむきになつて怒るなよ。これには譯のあることだ。こゝにゐる若い人は小間物屋の彦兵衛さんの息子で、これからおまへの兄貴と權三を證人にして、お父さんの無實の罪を訴へて出ようといふのだ。

助八　證人ならば家主が附添ひで、おとなしく連れて行くがいゝぢやあねえか。なんで縄をかけるのだ。

六郎　そのわけは今云つて聞かせる。みんなもよく聞け。今度の一件は並一通りのことではいけない。本來ならばこの彦三郎さんがどこにか宿を取つて、その町名主の手から御奉行所へ訴へて出るのが順當だが、そんなことでは容易に埒が明かないばかりか、一旦落着したお捌きの再吟味を願ふなどと云つては、御奉行様のお手許まで達かないうちに、下役人の手で握り潰されてしまふのは知れてゐる。そこでおれが考へたには、この三人に縄をかけて御奉行所へ牽いて行つて、小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者がわたくし方へ押掛けてまゐり、父彦兵衛は決して盜みなど致すものでない。それを罪人と定められたは恐れながらお上のお眼がね違ひ、二つには家主の不穿索と、さん〳〵の惡口を云ひ募るのみか、長屋の鶏籠かき權三助十の兩人もその腰押しをいたして、理不盡の亂暴狼藉をはたらき……。

權三　（おどろいて。）嘘だよ、うそだよ。おれ達が何をするものか。

助十　御奉行所へ行つて、そんな出鱈目を云はれちやあ大變だ。

六郎　まあ、騒ぐなよ。そのくらゐに云はなければ中々お取上げにはならないのだ。そこで、よんどころなく長屋中の者うち寄つて右三人を取押へ、かやうに引立てゝまゐりましたれば、何とぞ上の御威光を以て彼等に理解を加へ、穏便に引取りまするやうに御取計らひを願ひ上げますると、おれの口から斯う訴へ出るのだ。どうだ、判つたか。かうすれば屹とお取上げになろに違ひない。

助八　なるほどさうかも知れねえな。こいつは巧めえことを考へ出したね。

おかん　大屋さんは正直な人だと思つてゐたら、うそをつくべら〳〵云つて遣らあ。細工は流々、仕上げを御覽じろだ。

のは中々上手だわねえ。

助八　まつたく隅へは置かれねえや。

六郎　つまらないことを褒めるな。こつちは一生懸命だ。そこで、お白洲へ呼び込まれたら、それからはめい〳〵の腕次第で、彦三郎さんは自分の思ふことを存分に云ふが好し、權三と助十は自分の見た通りを逐一申立てゝ、馬喰町の隠居殺しはどうしても勘太郎の仕業であらうと存じますと、はつきり云ふのだ。（考へて。）彦三郎さんは大丈夫だらうが、おまへ達にそれが出來ろか。

權三　出來ても出來ねえでも仕様がねえ。今も嘸に云はれた通り、一つ長屋の彦兵衛さんが縄附きになつて出て行くのを知つてゐながら、今まで默つてゐたのはどうも良くねえ。實はわつしも内々は氣が咎めて、なんだか寐ざめが好くなかつたのだから、その罪ほろぼしに出來るだけ遣つてみませうよ。

彦三郎　なにぶんお願ひ申します。（助十に。）おまへさんにも宜しくお頼み申します。

助十　まあ、心配しなさんな。かう見えても江戸つ子の神田つ子だ。自業のやん八で度胸を据ゑた日にやあ、相手が大岡様でもなんでも構はねえ、云ふだけのことは皆んな云つて遣らあ。細工は流々、仕上げを御覽じろだ。

權三　おや、おや、手前は急に強くなつたぜ。變な野郎だな。

六郎　だが、まあ、強くなつた方は結構だ。その勢ひで皆んな縛られてくれ。

おかん　（かんがへる。）縛られて行つて、すぐに歸して下さるでせうかねえ。

六郎　それは受合へない。町内あづけとでも來れば占めたものだが、吟味中は一先づ入牢といふことになるかも知れないな。

おかん　あら、牢に入れられるの……。（泣き出す。）お家主さん。それぢやあゝんまりぢやありませんか。罪もない内の人を牢へ入れて……。若しいつまでも歸されなかつたら、お前さんどうしてくれるんですよ。

助八　吟味中は入牢なんていふことになると、兄貴もちつと可哀さうだな。もし、大屋さん。兄貴の身代りにわつしを縛つて行つてくれませんかね。どうせ捨へ事なら兄貴でも弟でも縛ふめえ。わつしの亂暴は世間でも皆んな知つてゐるんだから、わつしが暴れたといふ方が却つて

本當らしいかも知れませんぜ。

六郎　だが、その晩のことを詳しくお調べになつたときに、本人でないと申口が曖昧になつていけない。やつぱり兄貴を縛るより外はないな。

助八（助十の顔なのぞく。）兄い、おめも好いかえ。

助十　いゝよ、いゝよ。大丈夫だ。

助八　だが、どうもおれを遣つた方ばよさゝうだな。大屋さん、どうしてもいけまんかえ。

六郎　まあ、まあ、さう案じることはない。（おかんに。）おまへも泣くなよ。自慢ぢやあないが、大岡樣とこの家主が附いてゐるのだ。決して惡いやうにはならないよ。

おかん　（不安らしく）それもやつぱり大屋さんの嘘ぢやありませんかえ。

六郎　おれだつて無暗に縛をつくものか。安心しろよ。

おかん　若しもこれぎりで内の人が歸つて來なかつたら、屹とおまへさんを恨むからさう思つておいでなさいよ。（泣く）

彦三郎　（氣の毒さうに）どうも皆さんに御迷惑をかけまして、なんとも申譯もないことでございます。（六郎兵衛に。）では、お繩をおかけ下さりませ。（兩手をうしろへ廻す。）

六郎　おまへさんはわたしが縛る。（雲哲等に。）おまへ達は權三と助十を縛つてやれ。

雲哲　あい、あい。長屋中の持て餘し者がどつちもたうとう繩附きか。

顯哲　これだから惡いことは出來ないな。

權三　なにを云やあがる。手前たちの知つたことぢやあねえ。

助十　あとでびつくりしやあがるな。さあ、どうとも勝手にしやあがれ。

（權三も助十も覺悟して縛られようとする。）

六郎　これ、もつとぐらあ痛くつても構はない、遠慮なしにぐる〳〵卷きにふん縛れよ。

雲哲　大屋さんからお許しが出たのだ。せい〳〵嚴重に縛つてやれ。

顯哲　はゝ、面白い、面白い。

おかん　なにが面白いものか。ほんたうに好い面の皮だ。

助八　こいつ等、面白半分に騷ぎ立てやあがると、おれが料簡しねえぞ。

六郎　はて、喧嘩をしてはならない。靜にしろ、靜にしろ。

（雲哲と顯哲は笑ひながら二人を縛りあげる。六郎兵衛

も彦三郎を縛る。）

六郎　ところで、そつちの二人は兎も角も、この人を數寄屋橋内まで引摺つて行くのは可哀さうだ。（土間をみかへる。）おゝ、丁度そこに駕籠がある。と云つて、權三と助十は繩附きで擔がせるわけにも行かず、これ、助八。だれか相棒をさがして擔いで行け。

助八　え、おれにかつがせるのかえ。

六郎　あたりまへよ。貴樣の商賣ではないか。

助八　商賣は商賣だが、こいつは氣のねえ仕事だな。どうで酒手は出やあしめえ。

六郎　ぐづ〳〵云はずに、早く相棒を見つけて來いよ。おゝ、誰彼といふよりも、雲哲、おまへが片棒かついでやれ。

雲哲　大屋さんのお指圖だが、これは難儀だ。おれも弔ひの荳荷ひはかついだが、生きた人間を乘せたのはまだ一度も擔いだことがないので……。

助八　まあ、仕方がねえ、おれが先棒になつて遣るから、あとからそろ〳〵附いて來い。さあ、手をかせ。

雲哲　やれ、やれ。兎かく長屋に事なかれだ。

（助八と雲哲は土間から駕籠を持ち出してくる。）

彦三郎　いえ、それではあんまり恐れ入ります。

六郎　なに、遠慮はないから乘つておいでなさい。

（六郎兵衛は彦三郎の手を取りて駕籠にのせる。助八と雲哲は身支度をする。おかんは奥に入る。上のかたより猿まはし與助がうろ〳〵出づ。）

與助　大屋さん。井戸がへは何うしますね。

六郎　急に大事の用が出來て、おれは御番所へ出なければならないから、井戸がへの方はまあ宜しく遣つてくれ。おお、さうだ。おまへにも用がある。顯哲は權三の繩取りをして、おまへは助十の繩を取つて行け。

與助　（おどろいて。）え、どこへまゐります。

六郎　南の御奉行所へ行くのだ。

與助　え。（ふるへる。）

六郎　なにも怖がることはない。おれが一緒に附いて行くのだから安心しろ。

與助　はい、はい。

六郎　併し猿を背負つてゐては少し困るな。だれかに預けて行け。

與助　いえ、この猿めは迚もわたくしの傍を離れませんから、一緒に連れて行かして下さい。

六郎　では、まあ勝手にするがいゝや。（一同に。）さあ、め

いめいの役割がきまつたら、日の暮れないうちに出かけようぜ。

（願哲は權三の繩を取り、與助は助十の繩を取りて引立てる。助八と雲哲は駕籠を舁き上げようとして、雲哲はよろける。）

助八　おい、おい、しつかりしろよ。

雲哲　おれは素人だ。仕方がない。

（奥よりおかんは新らしい手拭と半紙を持ちて出づ。）

おかん　まあ、待つてください。（權三のふところに手拭と紙を入れる。）おまへさん、達者で歸つて來て下さいよ。

權三　えゝ、滿喜でもねえ、泣くな、泣くな。すぐに歸つて來るよ。

助八　（それを見て。）あ、おれも忘れた。待つてくれ、待つてくれ。（わが家の奥へかけ込む。）

六郎　（氣がついて。）あ、おれも忘れた。これ、雲哲。このまゝで御番所へは出られない。家へ行つておれの羽織を取つて來てくれ。

雲哲　大屋さんは相變らず人使ひが暴いな。

六郎　生意氣なことをいふな。この腐人坊主め、早く行つて來い。

雲哲　あい、あい。（上のかたに去る）

おかん　（權三に。）おまへさんも着物を着かへて行つちやあどうだえ。

權三　繩をほどいて又縛られるのは面倒だ。これでいゝ、これでいゝ。どうでお花見に行くんぢやねえ。

（家の奥より助八は緡の錢を持ちて出づ。）

助八　地獄の沙汰も金次第といふが、身上ふるつても二百の錢しかねえ。これでも何かの役に立つかも知れねえから、持つて行くがいゝぜ。（助十のふところに押込む。）

助十　嘘つた二百ばかりがどうなるものか。見つともねえから止せ、止せ。第一それをおれに奥れてしまふと、あしたの米を買ふ錢があるめえ。

助八　なに、おれは一日ぐらゐ食はずと生きてゐられらあ。まあ、まあ、持つて行く方がいゝよ。

おかん　ほんたうに心細くつてならないねえ。（權三に。）おまへさんにも幾らか持たして上げたいんだけれど……。ちよいとお待ちよ。表の質屋へ行つて來るからさ。

權三　そんなことをしてゐると遲くなる。すぐに歸つて來るんだから、錢なんぞは要らねえ、要らねえ。

（上のかたより雲哲は夏羽織を持ちて出づ。）

六郎　御苦勞、御苦勞。（羽織をきる。）さつきも云ふ通り、おれもこの年になるが、かういふ事は初めてだ。當年六十歳の初陣で、なんだか武者震ひがして來たやうだ。

權三　大將の大屋さんが顔へ出しちやあ困るぜ。

助十　どうぞしつかりお願み申しますよ。

六郎　なに、大丈夫。さあ、威勢よく出陣だ。

喜三郎　皆さん、おねがひ申します。

權三　さあ、繩出せ。

助十　くり出せ。

（六郎兵衛に先に立ち、助八と雲哲は喜三郎をのせたる駕籠をかきあげると、雲哲は又よろける。助八も一緒によろける。權三と助十は願哲と與助に繩を取られてゆく。おかんは不安らしく見送る。石町の夕七つの鐘きこゆ。）

――幕――

第二幕

前の場とおなじ道具。權三と助十の家。第一幕より一月ほど後の朝。

（權三の家では、權三とおかんが酒の膳を前にして、夫婦喧嘩をしてゐる。）

權三　（片肌ぬいで。）やい、やい、この阿魔、叩つ殺すからさう思へ。

おかん　さあ、殺せるなら殺して御覽。いくら自分の女房でも、横町の黒や斑を殺したのとは譯が違ふからね。おまへさんも勘太郎の二代目になりたいのかえ。

權三　なに、勘太郎の二代目だ。おれがいつ人殺しをした。

おかん　現在あたしをぶち殺さうとしてゐるぢやあないか。勘太郎は赤の他人を殺したんだが、おまへは自分の連れ添ふ女房を殺さうといふのだから、なほ〳〵罪が深いよ。

權三　べらぼうめ。手前なんぞは横町の黒や斑と大した違えがあるものか。黒や斑はおれの顔をみると、尻つ尾をふつて來るだけも可愛らしいや。

おかん　尻つ尾をふつて來るどころか、あたしなんぞはこんな家へ來て、女房の役からお爨どんの役まで勤めてゐるんぢやあないか。それでも可愛くないのかよ。一體おまへだの、隣の助十だのといふ奴を唯置くといふ法があるものか。このあひだの時に牢屋へでも投り込んでしまへばいゝものを、町内預けにして無事に歸してよこしたお奉行樣の氣が知れないねえ。

權三　あのときに手前は一粒十六文といひさうな涙をこぼし

て、おい〳〵泣きやあがつたのを忘れたか。おれが町内あづけになつて、無事に歸つて來た顏をみると、手前は又むやみに喜んで、子供のやうに手放しで泣きやあがつこうして、大岡樣はありがたいと手をあはせて拜んだちやあねえか。今になつてお奉行樣の氣が知れねえものねえものだ。手前勝手も好加減にしろ。

おかん　そのときは其時さ。けふのやうに亭主風を吹かせて勝手氣儘のことを云はれちやあ、あたしだつて蟲が承知しないだらうぢやないか。

權三　亭主が酒を買つて來いといふのが、なんで勝手氣儘だ。どんな裏店でも一軒のあるじが、酒ぐらゐ飲むのは當りめえだぞ。

おかん　一軒のあるじなら主人らしく、酒を買ふ錢を五十でも百でも、耳を揃へてならべてお見せよ。

三　その錢がねえから手前に頼むのぢやねえか。判らねえ外道だな。

おかん　外道でも般若でも、賣草はもう何にもないよ。

權三　それだから大屋さんへ行つて頼めといふのだ。

おかん　家賃を小半年も溜めてゐる上に、そんな蟲のいゝことが云つて行かれるものかね。まして此の矢先ぢやあないか。

權三　この矢先だから頼みに行けといふのだ。ふだんの時とは譯が違はあ。

おかん　そんならお前が自分で行つておいでな。

權三　おれが行かれねえから、手前に頼むのだ。さういふことは女の役だ。

おかん　金を借りに行くのは女の役だ……。（あざ笑ふ。）權三現樣がそんなことをお決めたすつたのかえ。

權三　あゝ云へば斯ういふと、手前のやうに亭主を見くびつてゐる女も世界に少ねえものだ。

おかん　おまへのやうに女房をいぢめる亭主も世界にたんとあるまいよ。

權三　うぬ、もうどうしても助けちやあ置かねえぞ。念佛でも題目でも勝手に唱へてゐろ。

（權三は土間に飛び降りて、駕籠の息杖を持ち來れば、おかんは掻いくゞりて駕籠のかげに隱れるを、權三は杖をふりあげて追ひまはす。上のかたより猿まはし與助は商賣に出る姿にて、猿を背負ひて出で、この體をみて割つて入る。）

與助　又いつもの夫婦喧嘩か。まあ、まあ、靜にしなさい。

權三　こん畜生があんまり不貞腐るから、ぶち殺してしまはうと思ふのさ。

おかん　まあ、聽いて下さいよ。毎日商賣にも出られないで、米櫃がからつぽ付いてゐる最中に、朝から酒を買への何のと勝手な熱ばかり吹くから、あたしが少し口答へをすると、すぐに生かすの殺すのといふ騒ぎさ。愛想が盡きるぢやあありませんか。

與助　どつちの贔屓をするでもないが、どうもそれは御亭主の方がよくないやうだな。

權三　なぜ惡いんだよ。

與助　なぜと云つて、おまへは町内あづけの身の上でありながら、酒を飲んで、女房を生かすの殺すのと騒ぎ立てゝ、そんなことがお上の耳に這入つたらどうするのだ。今度の一件の落着するまでは、せい〳〵謹慎してゐなければなるまいではないか。

おかん　それをあたしが云つて聞かせても、馬の耳に念佛なんですよ。

權三　うるせえ。引込んでゐろ。（すこし眞面目になつて。）なるほど、おめえの云ふ通り、こんなことが聞えたら好くねえだらうね。

與助　それはよくないに決まつてゐる。それだから、まあおとなしくしてゐなさいと云ふのだ。

權三　むゝ。（いよ〳〵悄げて。）どうも詰らねえことになつてしまつたな。

（この時、障の助十の家でも怒鳴る聲がきこえる。）

助十　この野郎、どうしても唯は置かねえぞ。

助八　喧嘩なら廣いところへ出て來い。

（臺所の破れ障子を蹴放して、助八は擂粉木を持ちて跳り出づ。つゞいて助十は出刃庖丁を持ちて出づ。）

おかん　あら、隣でも大變だよ。

與助　あつちは刃物を持つてゐる。これはあぶない。

（與助は猿を繫におろして、佛々ながら留めようとしてゐると、上のかたより顔人坊主の雲哲と腦哲は商賣に出る姿にて、住吉鄙の傘をかつぎて出で、これを見て驚ぐ。）

雲哲　やあ、やあ、又はじめたのか。

腦哲　刃物をふりまはしては劍難だ。

（助十と助八は捨臺詞にて聞つてゐる。雲哲と腦哲は思案して、權三の家の土間から駕籠を持ち出し、與助も手傳ひて、よき隙を見て助十と助八のあひだに突き出し、その駕籠を枷にして二人を隔てる。）

助十　えゝ、邪魔なものを持出しやあがるな。
助八　早く退けろ、退けてくれ。
雲哲　まあ、待つた、待つた。
鶴哲　あぶない、あぶない。
與助　兄弟喧嘩もいゝ加減にじなさい。
權三　さう〳〵しい奴等だな。（緣先に出る。）おい、助十。もう止せよ。おれたちは町内あづけの身の上だから、むやみに騒ぎ立てるとお咎めを受けるのを知らねえか。
助十　そりやあおれも知つてゐるが、あの野郎があんまり癪に障るからよ。
おかん　（表に出る。）朝つぱらから喧嘩なんぞをして見つともないぢやないか。一體どうしたの。
助十　町内あづけの身の上で、うつかりと出あるくわけにも行かず、よんどころなしに小さくなつてゐると、あの野郎め、その思ひやりも無しに毎晩遊び歩いてゐやあがつて、ゆうべもたうとう歸らねえ。仕方がねえから、今朝もおれが水を汲む、飯を炊くといふ始末だ。そこへぼんやり歸つて來やあがつて、碌に挨拶もしねえでおれの炊いた飯を平氣で掻つ食つてゐやあがる。あんまり人を馬鹿にしてゐやあがるから、おれが一番きめ付けてやると、遣ねぢに食つてかゝつて來やあがる。野郎め、ゆうべは何處かで振られて來やあがつて、その八つ中りを兄貴に持つて來るなんて、途方も途徹もねえ奴だ。おれが腹を立つのも無理はあるめえ。
助八　一年に一度や二度ぐらゐ兄貴に飯を炊かせたつて罰のあたるほどのこともあるめえ、第一その米はだれが買つたんだよ。
助十　おれはお預けの身の上だ。
助八　おあづけを好い幸ひにして、弟にばかり働かせることがあるものか。せめて小遣ひ取りに草鞋でも綯へといふのに、それもしねえで毎日毎晩ごろ〳〵してゐやあがる。一體、家の兄貴だの、隣の權三だのといふ野郎どもを、無事に歸してよこすといふ、お寄行樣の氣が知れねえ。このあひだから牢屋へぶち込んで置げばいゝのだ。
權三　こいつも鼻と同じやうなことを云やあがる。手前の兄貴はどうだか知らねえが、この權三は牢に入れられるやうな惡いことはしねえのだ。うそだと思ふなら、大岡樣のところへ行つて聽いてみろ。
助八　えゝ、わざ〳〵聽きに行くまでもねえ。どうで所拂ひか追放にでもなる奴等だから、お慈悲で當分歸してくれ

たのだ。手前達は知らねえのか、左官屋の勘太郎はきのふの夕方、無事に歸されて來たぞ。
助十　（おどろく。）え、ほんたうか。
（權三もびつくりして出て來る。）
權三　おい、おい。ほんたうか、本當か。
おかん　本當に勘太郎は歸されたのかえ。
助十　そりやあ些とも知らなかつた。（又かんがへて。）やい、手前。おれ達をかつぐのぢやあねえか。
助八　（すました顏で。）まあ、かれこれ云ふことはねえ。論より證據だ。豐島町へ行つて勘太郎の家を覗いてみろ。今ごろは鼻唄で祝ひ酒でも飲んでゐらあ。
權三　こりやあ驚いたな。どうしたのだらう。
おかん　やつぱり人違ひだつたのかねえ。
雲哲　なるほどさう云へば、お奉行所からの差紙で、大屋さんと彦三郎さんは今朝早くから數寄屋橋へ出て行つたさうだ。
助十　ふむう。（權三と顏なみあはせる。）
與助　大屋さんの話では、左官の勘太郎といふ奴は不斷から身持のよくない男で、木鐵の鍛より賽ころを持つ方を商賣にしてゐる。さうして、丁度去年の暮頃から博奕に勝つたと云つて、急に身なりを拵へたり、酒を飲んだり、女を買つたりして遊びあるいてゐる。いや、まだそればかりでなく、馬喰町の女隱居の殺された晩にも、あいつは夜が更けてから歸つて來て、木戸を叩いて窃つと入れて貰つたといふことだ。
おかん　そのほかにも色々怪しいことがあるから、どうしても勘太郎の仕業に相違ない。今度の一件も十に九つはこつちの物だと、大屋さんも大變よろこんでゐなすつたのだが、どういふわけでそれが急に引つくり返つてしまつたのかねえ。
鶴哲　流石の大屋さんも今朝はよつぽど苦勞ありさうな顏をして出て行つたといふから、どうもむづかしいのかも知れないな。
與助　八さんのいふ通り、勘太郎がゆうべ歸されて來たのが論より證據だ。
おかん　困つたことになつたねえ。（權三に。）おまへさん。どうするえ。
權三　どうすると云つて……。おれも面喰つてしまつた。おい、助十。どうも困つたな。
助十　まつたく困つたな。だからおれが止せといふのに、手

前がつまらねえ婆婆ッ氣を出して、云はずとも好いことをべら〳〵しやべつたもんだから、到頭こんなことになつてしまつたのだ。

樓三　それだからおれも唯、勘太郎らしいと曖昧に云つて置かうと思つたのを、大屋さんが何でも勘太郎に相違ございませんと、はつきり云つてしまへと指圖するもんだから、おれもつい其氣になつたのだ。手前だつて御白洲で、確に左樣でございますと云つたぢやねえか。

助十　そりやあお奉行樣が確に左樣かと念を押すから、おれの方でもついうつかりと、ハイ左樣でございますと云つてしまつたのよ。おれが好んで云つたわけぢやあねえ。

樓三　好んで云つても云はねえでも、御白洲で一旦云つてしまつた以上は、もう取返しは付かねえ。どうしたら好からうな。

助十　さあ、どうしたらよからう。おい、入。なんとか工夫はあるめえかな。

助八　それ見ねえ。めい〳〵のからだに火が付いてゐるのだ。兄弟喧嘩なんぞしてゐるやうな場合ぢやねえぢやあねえか。

おかん　ほんたうに夫歸喧嘩どころの騒ぎぢやあないよ。

樓三　所拂ひぐらゐで濟むだらうか。（かんがへる）もしお呼び出しになつて、今度こそは入牢申付くるなぞと來た日にやあ助からねえぜ。

輿助　あの彦三郎といふ人は年も若し、親孝行の一心から出たことだから、上のお慈悲もあるだらうが、おまへ達はどうだかなあ。

助十　このあひだは牢へぶち込まれようが何うしようが構はねえといふ料簡だつたが、さて斯うなつてみると、どうも牢なんぞへは行きたくねえ。やつぱりあの時に止せばよかつたのだ。やい、樓三。おれは一生手前を恨むぞ。

樓三　そんなことを云つてくれるなよ。かうなりやあお互えに一蓮托生ぢやあねえか。なにしろ何うも弱つたな。

おかん　（樓三の袖をひく。）おまへさん。いつそ今のうちに妻を隱しちやあどうだえ。

樓三　おれが逃げたら、あとの者に難儀がかゝるだらう。今度はおめえが町内預けにでもなるかも知れねえぜ。

おかん　（涙ぐむ。）そりやあ亭主の爲だもの、仕方がないやね。

助八　ぢやあ、兄い。おめえも逃げることにするか。逃げるなら、大屋さん達の歸らねえうちの方がいゝぜ。

雲哲　だが、二人を逃がしてしまつたら、家の者ばかりでなく、大屋さんや月番の行事は勿論、まかり間違へば相長屋一同が迷惑することになるだらう。

顯哲　さうだ、さうだ。皆ながどんな迷惑を被ることになるかも知れないから、駈落なんぞは止して貰ひたいな。

輿助　それもうまく逃げ負せればいゝが、途中で捉まつたが最後、罪はいよ〳〵重くなるばかりだ。

助十　それもさうだな。ぢやあ、まあ大屋さんの歸るまで、おとなしく待つとしようか。

助八　大屋さんが歸つて來たら、もう間にあふめえぜ。

輿助　いや、駈落はよくないよ。

おかん　それぢやあ何うすればいゝのさ。

輿助　それはわたしにも判らないが、なにしろ困つた事が出來たものだ。

助十　おれたちはあの彦三郎の尻押しをして、大屋の家へあばれ込んだと云ふことになつてゐるんだからな。

樓三　おまけにその勘太郎が人遣ひと來た日にやあ、どう考へても無事ぢやあ濟むめえ。

助十　こりやあやつぱり駈落だ。

輿助　いけない、いけない。

（輿助と雲哲、顯哲は助十を支へてゐる。下のかたの路地口より左官屋勘太郎、三十二三歳、身綺麗にいでたち、角樓と鶴をさげて出づ。）

雲哲　あ、勘太郎が來た。

輿助　なに、勘太郎が來た。

顯哲　ほんたうに來た、來た。

（人々は顔をみあはせ、樓三と助十は思はずあとへ退る。勘太郎は何氣なく一同に挨拶する。）

勘太郎　みなさん、急にお涼しくなりました。

輿助　（なんだか氣の毒さうに。）朝晩はめつきりと涼風が立つて來ました。

勘太郎　御近所に居りながら、つい〳〵御無沙汰ばかり致して居ります。

輿助　はい、はい。おたがひで樣で……。

（人々は勘太郎のこゝろを測りかねて、不安らしく眺めてゐる。）

勘太郎　駕籠屋の樓三さんと助十さんの家はこゝでございますね。

おかん　（もぢ〳〵しながら。）はい、はい。

助八　（度胸を据ゑて進み出づ）そつちが樓三、こつちが助

十の家ですが、なんぞ御用ですかえ。

勘太郎　ときど〳〵錦湯でお目にかゝつてゐながら、ついお見それ申しました。お前さんは助さんの弟さんでしたね。わたしは豐島町の勘太郎ですよ。（云ひながら權三と助十に眼をつける。）おゝ、權さんも助さんもそこにゐるのか。

（權三と助十はだまつて俯向いてゐる。）

勘太郎　早速ですが、わたしも飛んだ災難で、小一月も傳馬町の暗いところへ送られてゐましたが、流石は大岡越前守様のお捌きで、白い黒いはすぐに判りまして、きのふの夕方、無事に下げられて來ました。

おかん　（やはりもぢ〳〵しながら。）それはまあお目出たうございました。

勘太郎　今度のことに就きましては、權さんと助さんには色色御心配をかけたやうに聞いて居りますので、これはほんのお禮のおしるし、甚だ失禮ではございますが、どうぞお納めをねがひます。

おかん　はい。（とは云ひながら手を出しかねてゐる。）

勘太郎　（助八に。）では、八さん。どうぞこれを……。

助八　（同じく變な顔をして。）え、どうしてこんな物を奥んなさるのだね。

勘太郎　今も申す通り、わたしも明るい體になつて世間へ出て來ましたから、近所隣へも心ばかりの配り物をいたしました。そのついでと申しては何ですが、これを權さんと助さんへもお禮心に差上げたいと存じまして……。

助八　ひどく切口上で、をかしいぢやあねえか。なんで禮をくれるのだ。（勘太郎の顔をながめてゐる。）

與助　おゝ、角樽に鯛……。いや、なか〳〵行き屆いたものだな。

（與助は猿を背負ひ、近寄つて覗く時、その背中にゐる猿は不意に手をのばして鯛を引つたくる。）

與助　（おどろいて。）えゝ、飛んでもないことをするな。（鯛を取返して、猿のあたまを打つ。）さあ、さあ、お詫をしろ。お詫をしろ。

（與助は背中より猿をおろし、その頭をおさへてお辭儀をさせようとすれば、猿はその手を拂ひ退け、齒をむき出して勘太郎に飛びかゝる。不意におどろきたる勘太郎は、たちまち殘忍の相をあらはし、兩手に猿の喉を强くおさへて絞め殺し、その死骸を投げ出す。人々は呆氣に取られたやうに眺めてゐると、與助は猿の死骸をかゝへ

て泣き出す。）

與助　おゝ、猿めが死んだ、死んだ。

雲哲　死んだ、死んだ。

おかん　まあ、可哀さうだねえ。

勘太郎　いや、これはわたしが惡かつた。猿は死にましたか。

與助　（泣く。）死にました、死にました。

（勘太郎は紙入から金三枚を取出し、紙にのせて出す。）

勘太郎　なにしろ猿めが無暗に飛びついて來るので、わたしも夢中になつて飛んだことをしてしまひました。お前さんの商賣道具をなくなした償ひと、云つては少いかも知れないが、これでまあ堪忍してください。

（與助はだまつて泣いてゐる。）

雲哲　（與助のそばに寄る。）商賣道具の猿を殺されては、おまへも定めて困るだらうが、三兩といふ金があれば又どうにかなる。

雲哲　これも災難とあきらめて、我慢しなさい。我慢しなさい。

與助　幾年も馴染んだ此の猿を金にかへられるものか。（又泣く。）

雲哲　さう云つても今更仕樣がない。（勘太郎の手より金を受取る。）さあ、これで代りの猿を買へばいゝのだ。

（雲哲と顯哲は與助に金をわたし、なだめながら助十の家の緣の方へ連れてゆく。與助は猿をかゝへて泣いてゐる。）

勘太郎　わたしはなぜこんな手暴いことをしたか。くれ〴〵も堪忍して下さい。あゝ、これで肴も無しになつてしまつた。まあ、酒だけでも納めて貰ひませう。

（勘太郎は落ちてゐる鯛を足にて蹴飛ばす。このあひだに權三と助十は眼で知らせ合ひ、形をあらためて勘太郎のまへに出る。）

權三　もし、勘さん。どうも何とも申譯がありません。この長屋にゐた彥兵衛のせがれが大坂からわざ〳〵下つて來て、おやぢの無實を訴へると云つて泣いて騒ぐ。大屋さんも氣の毒がつて色々世話を燒いてやる。それに釣り込まれてわつし等もついうつかりと詰まらねえことを饒舌つたもんだから、今さら拔きさしもならねえやうな羽目になつてしまつて、たうとうお奉行所まで引張り出されるやうなことになつてね。

勘太郎　（冷かに。）いや、それは大抵知つてゐますよ。その

節は色々御心配をかけました。

助十　まあ、さう云はねえで、一通りは聽いておくんなせえ。何もわつし等だつて確に見とゞけたと云ふわけぢや無し、ほんの夜目遠目でちらりと見たゞけのことだから、正直にその通り云ふ筈だつたのが、御白洲へ出て曖昧な事を云つちやあならねえ、何でもはつきりと物をいへと大屋さんが云ふもんだから、物の間違ひが自然と大きくなつて、お前さんにも飛んだ御迷惑をかけてしまひました。今となつちやあ、わつし等もまつたく後悔してゐるんですから、どうかまあ料簡しておくんなせえ。

おかん　ほかの事とは譯が違つて、まつたく料簡の爲にくいことでせうが、わたくし共が打揃つて幾重にもお詫をいたしますから、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

勘太郎　（しゞかに。）さうめい〳〵に御挨拶にやあ及びません。腹を立つてゐるくらゐなら、こんな物を持つてわざわざお禮に來やあしませんよ。（やゝ皮肉らしく。）つまりはわたしの身狀が惡いからで……。左官屋の勘太郎は泥坊でもしさうな奴だ、人殺しでもしさうな奴だと、不斷からおまへさん達に睨まれてゐるので、自然こんなことになつたのですよ。

樓三　いや、さう云はれると、いよ〳〵穴へでも這入りたくなるが、そこをまあ勘辨しておくんなせえ。

助十　これに懲りてこの後は、決して他人樣の噂なんぞはしませんから、今度のところだけは何分勘辨して……。

勘太郎　まあ、同じことを幾度も云はないでもいゝ。なにしろ私はお禮に來たのだから　素直にこれを納めてください。わたしの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもないから。

助八　（むつとして）　おい、勘太郎さん。飛んだ人違ひをしてお前さんに迷惑をかけたのは重々こつちが惡い。それだから樓三も、兄貴も、この通り平あやまりに謝まつてゐるぢやあねえか。それにおめえは男らしくもねえ。堪忍するなら堪忍する、堪忍しねえなら堪忍しねえと、なぜ綺麗さつぱりと云つてくれねえのだ、柄にもねえ切口上で、意地の惡い御殿女中のやうに、うはべは美しく云ひまはしながら、腹には刺を持つてゐるのが面白くねえ。第一、お禮に來たとはなんの事だ。こつちはお前にあやまりこそすれ、おめえに禮を云はれる覺えはねえのだ。

勘太郎　（あざ笑ふ。）それはおまへさんの僻みといふものだ。お禮と云つたのが氣に入らなければ、わたしが無事に婆婆へ分て來た身祝ひだと思つてください。

助八　いけねえ、いけねえ。おれの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもねえなぞと、忌なことを云ふぢやあねえか。酒の毒よりもおめえの口に毒がある。それを默つて聽いてゐられるものか。折角のおこゝろざしだが、兄きに代つておれが斷るから、こんなものは持つて歸つて貰ひてえ。

勘太郎　それでは喧嘩だ。もう少し穏かに口をきいて貰ひたいな。

（樓三の家の縁の下から一匹の犬が出て來て、勘太郎をみて凄まじく吠えながら飛びかゝらうとする。勘太郎は再び兇暴の相をあらはして屹と睨む。犬はます〳〵吠える。）

樓三　又のら犬が出て來やあがつたか。

強吉　貴樣も殺されるな。叱つ、叱つ。

（ふたりに逐はれて犬は上のかたへ逃げ去る。）

おかん　（云譯らしく。）　あの野良犬にやあ困るねえ、だれを見てもすぐ吠えるんだから。

樓三　犬だつて可愛くねえ奴にやあ吠えるのだらう。よく考へてみると、成程こりやあ八の云ふ通りで、折角のおこころざしは有難てえが、どうもおまへさんからこんな物を貰ひたくねえ。お禮にしてもお祝ひにしても、これは持つて歸つて貰はう。おい、助。さつきから無暗にあやまつて、損をしたやうだぜ。

助十　おれもさう思つてゐるのだ。（勘太郎に。）まつたくおめえの云ひ草は御殿女中で、忌にチク〳〵當るやうだ。堪忍しねえなら堪忍しねえ、恨みを云ひに來たなら恨みを云ひに來たとはつきり云つてくれ。面當てらしく酒や肴を持つて來て、眞綿に針で人をいぢめようとするのは、江戸つ子らしくねえ仕方だ。

勘太郎　なるほどお前さん達は江戸つ子だ。（又あざ笑ふ。）上方者の尻押しをして、江戸つ子にぬれ衣をきせるなぞとは、本當の江戸つ子でなければ出來ない藝だよ。

助十　やかましいやい。手前のやうな江戸つ子があるから、本當の江戸つ子の面が汚れるのだ。こんなものは持つて歸れ。（角樽を投げ出す。）

勘太郎　おまへさん達はあやまつてゐるのか、喧嘩を賣るのか。

樓三　もう斯うなりやあ喧嘩だ、喧嘩だ。

おかん　まあ、お前、お待ちよ。

權三　えゝ、牢へ入れられようが、首が飛ばうが構はねえ。こんな野郎は半殺しにして遣らなけりやあ氣が濟まねえ。のだ。

おかん　また喧嘩を始めちやあいけない。お止しよ。止しておくれよ。

（おかんは頻りに權三を支へる。）

勘太郎　近いうちにお咎めがあると思つて、みんな自棄になつてゐるのか。そんな病犬の相手になつて、折角明るくなつた體をもう一度暗いところへ遣られては堪らない。はゝゝゝゝ。

（勘太郎は笑ひながら下のかたへ行きかゝると、助十は無言で飛びかゝつて、勘太郎の横面をなぐる。）

勘太郎　えゝ、なにをしやあがるのだ。氣ちがひめ。

（勘太郎は又もや人相を一變して、左右を睨む。）

勘太郎　おとなしくしてゐりやあ增長しやあがつて、好加減にしろ。豐島町の勘太郎を知らねえか。この大哥さんと喧嘩をするなら、からだの骨から銀へて來い。

助八　こつちは生きてゐる人間だ。猿の喉を絞めるのとは譯が違ふぞ。

（助八は勘太郎にむしや振り付けば、勘太郎は突き退ける。助十は又むしやぶり付く。權三も留められるのを振切つて飛びかゝる。三人が途に勘太郎をねぢ倒して袋叩きにする。）

權三　おい、與助。こいつはおめえの猿のかたきだ。みんなと一緒になぐれ。なぐれ。

雲哲　なるほど猿のかたき討か。

顯哲　これも長屋の附合だ。

（與助は竹の鞭を把り、雲哲等も一緒に勘太郎をなぐる）

勘太郎　さあ、どいつも皆んな下手人だぞ。殺すなら殺せ。立派に殺してくれ。

權三　こいつを擲すと面倒だ。ふん縛つてしまへ。

助十　八。このあひだの繩を持つて來い。

（助八は奥へかけ込んで麻繩を持つて來る。）

おかん　縛つてもいゝのかえ。

助八　よくつても惡くつても縛ふものか。毒食はゞ皿までだ。

權三　さあ、早く縛れ、縛れ。

（助八は勘太郎を縛る。）

雲哲　どうも仕置が暴くなつて來た。縛つてしまふのは些とひどいな。

顯哲　うか〳〵してゐて、こつちまでが係り合ひになつては

ならない。長屋の附合も先づこのくらゐにして置かうか。

雲哲　これから先、何事が起つても、おれたちは知らないぞ、知ならいぞ。

（雲哲、顯哲は下のかたへ逃げ去る。）

與助　かたき討が濟んだら、わたしもこゝらにゐない方がよさゝうだ。

（與助も猿をかゝへて、おなじく路地の外へ逃げてゆきかけしが、又引返して來る。）

與助　これ、お役人が來たやうだぞ。

權三　なに、お役人が來た。

助十　そいつはいけねえ。どうしよう。

助八　どうしよう。

（三人はうろたへながら四邊を見まはし、助十は駕籠に眼をつける。）

助十　これだ、これだ。

權三　ちげえねえ。早くしろ、早くしろ。

（三人は繩からげの勘太郎を引摺つて駕籠のなかへ押込み、外から垂簾をおろす。おかんは不安らしく衷をのぞいてゐると、路地の口より石子伴作は捕方の者ふたりを連れ、雲哲と顯哲を先に立てゝ出づ。）

伴作　左官の勘太郎は確にこの裏にまゐつてゐるな。

雲哲　長屋の者と喧嘩をして居ります。

伴作　喧嘩をいたしてゐるか。

（伴作はつか〳〵と追み來る。權三夫婦、助十兄弟は薄氣味惡さうにあとへ退る。）

伴作　豐島町の左官屋勘太郎はいづれへまゐつた。

四人　え。（狐をみあはせる。）

伴作　こゝにまゐつてゐる筈ではないか。

權三　（曖昧に。）いえ、そんな者は……。

伴作　（雲哲等をみかへる。）たしかに來てゐると申したな。

雲哲　はい。その勘太郎は……。

助十　（あわてゝ眼で制す。）その勘太郎は……。もう歸りまして御ざいます。

伴作　（うたがふやうに。）歸つたか。

顯哲　でも、たつた今までこゝにゐた筈だが……。

權三　なに、歸つたよ、歸つたよ。この通り、どこにもゐねえちやあねえか。

（雲哲と顯哲は不審さうにそこらを見まはしてゐると、駕籠のなかにて勘太郎が叫ぶ。）

勘太郎　もし、お役人さま。勘太郎はこれに居ります。

（權三、助十等はぎよつとする。）

伴作　（捕方をみかへる。）それ。

（捕方は勘兵衛の雇人をあげて、勘太郎をひき出す。）

伴作　この者にはだれが縄をかけた。

（權三等はだまつてゐる。）

伴作　御用によつて勘太郎を召捕りにまゐつたところ、先廻りをして誰が縄をかけた。

權三　では、勘太郎はお召捕りになるのでございますか。

伴作　昨日一旦ゆるして歸されたは、深い思召しのあることで、かれの罪狀いよ／＼明白と相成つて、再びお召捕りに相成るのだ。

助十　いや、さうでございましたか。（安心して。）實はわたくしが縛りました。

權三　わたくしも縛りました。

助八　わたくしも手傳ひました。

伴作　おゝ、さうであつたか。委細はあらためて申し聞かせる。（捕方に。）それ、引立てい。

勘太郎　おかまひないと申渡されたわたくしが、どうして二度のお縄を頂戴いたすのでございませうか。

伴作　兎やかう申すな。縄掌に立て、立て。

勘太郎　（强情に。）いえ、恐れながら申上げます。

捕方　えゝ、立て、立て。

（伴作は先に立ち、捕方は無理に勘太郎を引立てゝ下のかたに去る。一同は呆氣に取られたやうにあとを見送る）

權三　なんだか狐に化かされたやうだな。

與助　やつぱり勘太郎はお召捕りになるのか。それといふのも、おれの大事の猿を殺した報いかも知れないぞ。

おかん　いくら猿だつて無暗にひねり殺すやうな奴だもの、人間だつて殺しぬねやあしないよ。

雲哲　さうだらうなあ。むやみにあいつに縄をかけて、どうなることかと心配してゐたが、これが過ちの功名と云ふのかな。

雲哲　かうなるとおまへ達はお叱りどころか、却つてお褒めにあづかるかも知れないぞ。

おかん　お褒めにあづからないまでも、お叱りがなければ結構さ。お役人が來たと聞いた時には、わたしは本當にぞつとしたよ。

（路地の口より家主六郎兵衛と彦三郎出づ。）

おかん　あら、大屋さんが歸つて來なすつた。

六郎　おゝ、みんなこゝにゐたか。まあ、まあ、めでたい、

目出たい。わたしもこれで重荷をおろした。

彦三郎　みなさんのお蔭樣で、わたくしの本望もやうやく達しまして、こんな嬉しいことはございません。

權三　本望が達したかえ。いや、それで判つた。今こゝへお役人が來て、勘太郎を召捕つて行きましたよ。

彦三郎　では、勘太郎はもう召捕られましたか。

助十　（自慢らしく。）おれ達がふん縛つてお役人に引渡して遣つたよ。

六郎　いや、それは早手廻しであつたな。

助八　それにしても、どうでもお召捕りになる勘太郎をなぜ一旦ゆるして歸したんだね。

六郎　そこが大岡樣のえらい所だ。いくら權三と助十が證人に出てくれても、その晩に見た奴は左官の勘太郎に相違ございませんと云ふばかりでは、ほかには確な證據がない。勘太郎は飽までもシラを切つて白狀しない。さすがのお奉行樣も吟味の仕樣がないので、先づおかまひないと云ふことで勘太郎めを一旦下げて置いて、實はちやんと隱し目附をつけてあつたのだ。ねえ、彦三郎さん。まつたく大岡樣はえらいではないか。

彦三郎　實に恐れ入りましてございます。今もお家主樣がおつしやる通り、一旦は勘太郎を無事に下げて、そつと隱し目附をつけて置かれますと、身におぼえのある勘太郎は、自分の家へ歸るとすぐに天井の板をはがして、そこに隱してあつた血だらけの金財布を取出して、惣所の竈の下で燒いてしまつたさうでございます。

六郎　どうで燒くなら早く燒いてしまへばいゝものを、そこがやつぱり運の盡きで、今まで天井裏に隱して置いて、それを竊と取出したところを、隱し目附にすつかり覗まれてしまつたので、もう動きが取れない。そこで、今日あらためてお召捕りといふことになつたのだから、彼奴いくら强情を張つても、今度こそは再び娑婆へは出られまいよ。そこで、權三と助十だがな。

二人　はい、はい。

六郎　かうなつた以上は、勿論町内あづけも免されるな。

二人　はい、はい。

六郎　身分の低い者どもにも似合はず、俠氣を以て小間物屋彦三郎に助力いたし、まことの罪人を訴へ出てたる段、近ごろ奇特に存ずるといふので、いづれ改めてお呼び出しの上、お奉行樣から直々のお褒めがある筈だぞ。

二人　やあ、ありがてえ、ありがてえ。

助八　ちやあ、御寵美も出るだらうか。

六郎　慾張つた奴だ。まだそこまでは判るものか。

與助　やれ、やれ、これでわたしも安心したが、かうなると彦兵衛さんはいよ〳〵氣の毒だつたな。

おかん　今更うたがひが晴れたところで、どうにも取返しが付かないからねえ。

六郎　いや、そこが又、大岡樣のえらい所だ。みんなびつくりするなよ。

（六郎兵衛は彦三郎に指圖すれば、彦三郎はこゝろ得て、路地の外へ出てゆく。）

權三　（かんがへる。）いくら大岡樣がえらいと云つても、まさか死んだ者を生かして返しやあしめえ。

助十　死ぬもの貧乏とはよく云つたものだな。

六郎　ところが、生かして歸してくれたよ。

一同　え。

六郎　大岡樣は初めから見透しで、どうも彦兵衛さんは本當の罪人らしくない。これ何かの間違ひであらうといふので、表向は牢中病死と披露して、實は生かして置いて下すつたのだ。

おかん　ちやあ、彦兵衛さんは生きてゐるんですかえ。

六郎　むゝ、むゝ、生きてゐるよ。

權三　彦兵衛さんは生きてゐる……どこまで行つても、狐に化かされてゐるやうだぜ。

助十　なに、化かされてゐることがあるものか。おれにはちやんと判つてゐらあ。なるほど大岡樣はえらいものだな。

助八　名奉行とあがめ奉つるも嘘ちやあねえ。

與助　彦兵衛さんが生き返つてくれりやあ、おれの猥なんぞは死んでもいゝ。

（下のかたより駕籠かき二人が附添ひ、彦三郎は父彦兵衛の手を取りて介抱しながら出づ。）

彦三郎　みなさん。御安心ください。父はこの通りでございます。

六郎　今はまつ雲間だ。幽靈ではないから よく見なさい。

彦兵衛　みなさん有難うございます。

一同　おゝ、彦兵衛さんだ、彦兵衛さんだ。

（一同はよろこんで彦兵衛のまはりに駈けあつまる。）

——幕——

佐々木高綱

登場人物

佐々木四郎高綱
その娘薄衣
佐々木小太郎定重
馬飼子之介
その姉おみの
高野の僧智山
鹿島與一
甲賀六郎
侍女小萬
佐々木の家來など。

江州佐々木の庄、佐々木高綱の屋敷。建久元年十二月の午後、晴れたる日。中央より下のかたにかけて、大いなる厩あり。但し舞臺に面せる方はその裏手と知るべし。中央よりすこしく上のかたには梅の大樹ありて、花は白く咲きみだれたり。奥の方には木立のひまに屋敷の建物みゆ。

（佐々木四郎高綱、三十七八歳、梅の樹の下に立ちて馬の洗足するを見てゐる。家來鹿島與一、四十餘歳。甲賀六郎、二十五六歳。おなじく馬の左右に立ちて見る。馬かひ子之介、二十歳前後の律義なる若者。名馬生月を厩のうしろに率き出して洗足さしてゐる。）

高綱　けふはよい日和になつたなう。比良のいたゞきに雪はみえても時候は俄に春めいて來たやうぢや。をちこちで小鳥が樂しさうに囀るわ。

與一　鎌倉どのが初めての御上洛に、かやうな日和つゞきと申すはまことにおめでたい儀でございまするな。

六郎　お先觸れの同勢はもはや尾州の熱田まで到着したとか申すことでございまする。

（高綱は聞かざるものゝ如く、馬のそばに進みてその平首を優しく叩きなどする。）

高綱　子之介、よう働くな。

子之介　はあ。（無言にて洗足さしてゐる。）

高綱　そちが陰ひなたなく働いて、あさゆふ心をつけて養ゥてくるゝほどに……。（家來を見かへる。）これ、見い。一時はすこしく衰へた馬も、このごろは再びすこやかに生ひ立つて、毛澤もひとしほ美しうなつたわ。

子之介　（恍々と馬をみる。）よい御馬でござりまするなう。

與一　よい筈ぢや。これは鎌倉どのが御秘藏の名馬で、世にもきこえたる生月ぢや。そちも定めて存じて居らう。かの宇治川の合戰に、梶原の磨墨に乘り勝つて、殿が先陣の功名させられたも、一つはこの生月の働きぢやぞ。

六郎　あの折のありさまは思ひ出しても勇ましい。名に負ふ宇治の大河には、雪解の水が滔々とみなぎり落ちて來る。川の向ひには木曾の人數およそ五百餘騎、楯をならべて待ち受けてゐたわ。

與一　まして河の底には亂杭を打つて、大網小網を張りわたし、馬の足をさゝへんと巧んである。なみ〳〵の者ではよも渡すまじと見てあるところへ、殿は生月、梶原は磨墨、黑馬二匹が轡をならべて、平等院の坤、たちばなの小島が崎よりざんぶ〳〵と乘り入つた。

高綱　（遮る。）えゝ、珍らしうもない。おけ、おけ。（馬にむかひて。）なう、生月。彼の宇治川を初めとして、つゞいて一の谷、八島、壇の浦、高綱と生死を共にして、そちも隨分働いたなう。が、それも今はむかしの夢で、そちも高綱も再び功名をあぐる時節はあるまい。あたら名馬も、飼殺しぢや。（嘆息しつゝ子之介にむかひ。）けふは二日、そちが亡父の命日ぢやぞ。もうよいほどにして身を清め、佛前に回向いたせ。

子之介　はあ。

高綱　もうそれでよい。厩へ牽いて繋いでおけ。

子之介　はあ。（馬をひかんとすれど動かず。）えゝ、なにが氣に入らいで拠るのぢや。さあ、行け、ゆけ。叱つ、叱つ。（馬はなほ動かず。與一と六郎も立寄る。）

與一　えゝ、どうしたものぢや。叱つ、叱つ。

六郎　さあ、行け、ゆけ。

（三人は無理に牽かんとすれば、馬は狂ひて騒散らさんとす。六郎倒る。與一等はうろたへ騒ぐ。馬は狂ひて走りゆかんとするを、高綱は遮りてその轡を取る。）

高綱　えゝ、なにを狂ふぞ。そちにも氣に入らぬことがあるとみゆるな。高綱も狂ひたいは山々ぢやが、狂うたとて濟まいたとて所詮は無駄な世のなかぢや。まあ、鎖まれ、

鎖まれ。（馬にむかつて諭すやうに云ふ。）

與一　（馬にむかつて罵るやうに。）この横着ものめが……。殿樣が直々にお手をかけられたら、この通り、おとなしくなつてしまうたわ。

（高綱は馬の口をとりて、子之介に渡す。子之介うけ取りて厩のうしろへ牽いてゆく。六郎は馬盥など片附ける。高綱の娘薄衣、十六七歳。侍女小萬を連れて、下のかたより出づ。）

薄衣　父上樣、これにお出でなされましたか。

高綱　日和がよければ厩に出て、馬に洗足さするを見てゐたのぢや。

薄衣　石山寺參詣のかへり途に、ついそこで旅の御出家樣にお逢ひ申しましたれば、お通れ申してまゐりました。

小萬　お見受け申したところが、ありがたさうな御出家樣。路をいそぐと一旦はお斷りなされましたを、無理にねがうて御案内申しました。

高綱　今日はこゝろざす佛の命日。よくぞそこに心が注いた。して、その御坊は……。

薄衣　（小萬を見かへりて。）早うこれへお通し申しや。

小萬　はい、はい。（引返して去る。）

高綱　（六郎を見かへる。）女子ばかりの出迎ひは無謬であらう。そちもまゐつて御案内申せ。

六郎　はあ。（去る。）

高綱　薄衣と與一は奥へまゐつて、寶をまゐらする用意なといたせ。

薄衣　かしこまりました。

（薄衣と與一は奥へ去る。六郎と小萬は、高野の僧智山を案内して出づ。智山は四十餘歳、旅すがたにて笠と杖とを持つ。）

高綱　（會釋して。）聖にはゆく手を急がせらるゝとか承はつたに、ようぞお立寄りくだされた。毎月二日はほとけの命日でござれば、誰にかぎらず、門前をすぐる出家をよび止めて、回向を頼みまゐらするが家例でござる。

智山　唯今御息女よりも右樣の儀をうけたまはつたが、さりとは御奇特のことに存じまする。してお身が佐々木殿でござるよな。

高綱　申しおくれたれど、それがしは佐々木四郎高綱、なにとぞ御見知り置きくだされい。

智山　拙僧は高野の山にすむ智山と申す者。諸國修行のために陸奥へ下り、歸り途には鎌倉より伊豆をめぐりて、こ

れより鶴山の道中でござる。

高綱　では、東海道を上られたか。

智山　あたかも鎌倉の將軍が上洛の道筋とて、宿々は以てのほかの混雜、われ等のやうな捜法師はこゝでもかしこでも追ひ散され、いやさん〳〵の目に逢ひ申したよ。はゝはゝゝ。

高綱　（打笑む。）それは定めて御迷惑のことゝお察し申した。

（六郎を見かへりて。）床几を持て。

六郎　はあ。

（六郎と小萬は奥に入る。）

高綱　して、鎌倉の同勢にはどこらあたりでお逢ひなされた。

智山　懇田の手前で一つになりましたが、かの同勢は二三日そこに逗留とか承はつたれば、その間にわれ等は道りぬけて、一足先に發足いたした。が、その行列の華やかさ、實に眼をおどろかすばかりでござつた。（高綱は耳をかたむけて聽く。）先づその人數は四五千騎もござつたか。

（六郎と小萬は床几を持ち來る。高綱は頭にて智山にすすめよと命じ、おのれも亦床几に腰をおろす。六郎と小萬は一禮して去る。）

智山　（床几に腰をおろして語りつゞく。）將軍はいづこにおはすか存ぜぬが、先供には北條、梶原、三浦、畠山、あとおさへには土肥・安達……なほ數々の大小名が平家の殘黨に備ふる用心もござらう、諸國に威勢を示すためでもござらう、いづれも甲冑爽かに扮裝つて、家々の紋打つたる旗をたてさせ、小春日和の海道筋を長々と續りゆくありさまは、勇ましいとも美々しいとも譬へて申すべきやうはござらぬ。まことに前代未聞との取沙汰、われ等もこの年になるまでに、かやうな目ざましい上洛は初めて見申したわ。われ等は出家の身で、うき世のことを兎かう申すではなけれども、輙朝といふ御人は果報めでたくおはすよなう。

高綱　（ひとり言のやうに。）それも皆この高綱故ぢや。恩知らずめが……。（罵る。）

智山　恩知らずとは……。（聞き咎める。）

高綱　（苦笑ひして。）いや、これはお聞かせ申しても詮ないことぢや。先づそれよりも、高綱の懺悔を一通りお聞きくだされぬか。今日御回向をたのみまゐらすると伸と申すは、わが身寄りでも無し、敵でもなし、味方でも無し、罪なくして相果てたる紀之介といふ馬士でござる。

（高綱は眉を皺めて、空をあふぎつゝ起つて徘徊す。智山は球數を爪繰りながら聽く。厩のかげより子之介忍び出でておなじく聽く。）

高綱　（しばらくして。）かぞふれば十年以前、治承四年の秋のはじめ、蛭ケ小島に於て輙朝が旗をあぐるといふ噂、ひそかに都へもきこえたれば、われ眞先に見參に入り申さんと、忍んで伊豆へ下りしが、浪人のかなしさには馬も有たず、徒歩にておぼつかなくも辿り〳〵て、八月二日のあかつきに野洲の河原にさしかゝると、まだ明けやらぬ朝霧のあひだより、雜鞍置いたる馬を追うて來る者がござつた。これ幸ひとよび止めて馬を借受け、むかうの岸までは渡りしが……これより遠き旅をゆくに、馬の足を假らでは不便なり、ぬすみて逃げんと馬をはやめて、二三町ばかり駈けぬくれば、馬士はおどろき追ひ來りて馬盜人よと罵りさわぐ。かくては是非も無し、馬をかへさば大事の間に合ふまじと……。こゝろを鬼にして……。

智山　（思はず叫ぶ。）あら、無慚……。由なき殺生をせられたよな。

高綱　馬を返さんとあざむいて、油斷を見すまし……。（突く眞似をする。しばしの沈默。）斯くしてやう〳〵馬を得たれば、無事に伊豆まで乘りつけて、おなじ月の十七日には八牧の屋形を攻めほろぼし、源氏再興の基をひらく。その後のことは申すまでもござらぬ。が、たゞ不憫なるは彼の馬士にて、その名を紀之介と申す由、かれの口より聞きたるを手がかりに、平家沒落の後この國中を隈なく詮議したるも容易に相分らず、このごろに至りて栗田の里に子之介といふ若者あり。（厩のかたを見る。子之介あわてゝ隱れる。）これぞ彼の紀之介の忘れがたみと知れたれば、呼び取りてあつく扶持せんと存ぜしに、彼はほかに望み無し、おのがなりはひは馬士なれば、馬飼ならば奉公せんと申すによつて、その云ふがまゝに厩の小者として召仕ひ、けふまで屋敷に置きまするが、これだけにて高綱の罪が消えませうか。せめては亡人の菩提を弔ふために、月の二日を命日とさだめ、供養をおこたらず營んで居ります。

智山　（うなづきて。）して、その子之介と申すはいつの頃より當家に身を寄すること〻相成りましたな。

高綱　三月ほど以前でござらうか。

智山　恨みを捨てゝかたきに奉公し、勤めぶりに如才はござらぬか。

高綱　かげひなたなく正直に立派いて居りまする。

智山　それもまた奇特のことでござる。み佛は慰怨無二と說かせられた。

高綱　慰怨無二……。（かんがへる。）佛の敎を學べばそのやうに悟られまするか。

智山　ほとけの敎を學ばずとも、悟らるゝものには悟らるゝ道理ぢや。現に彼の子之介とやらも、お身をかたきと恨んでは居らぬと申すではござらぬか。

高綱　子之介が高綱を恨まぬは、心からその罪を謝するといふ人のまことに感じたのではござるまいか。至誠は神を動かすとかうけたまはる。もし我に心のまことがなくば、かれも他さで我を恨みませうぞ。天下の人に皆まことがあらば、高綱にも不足はござるまいに……。

智山　佐々木殿ほどの勇士にも、なにかこの世に御不足がござるかな。

高綱　勇士なればこそ閑ゆる胸をおさへて、かやうに生きても居られまする。弱いものなら疾うの昔に、狂ひ死でもして居りませうわ。（衝と起つ。）御坊、なぞこの世の中にはまことなき奴輩がはびこつて、正しきものが虐げられるのでござらうな。

智山　（驚かす。）正法千年、像法千年の世はすぎて、今は末法の世でござる。それを救はんがために、われ等も努めて居るとは知られぬか。

（高綱はかんがへてゐる。奥より與一出づ。）

與一　御用意整うて居りまする。

高綱　（うなづきて。）さらば、御坊。

與一　どうぞお運りくださりませ。

智山　（起ちあがりて。）御案内おたのみ申す。

（與一は智山を案内して奥に入る。）

高綱　（庇を見かへりて。）子之介は居らぬか。子之介、子之介。

（庇のかげより子之介は着物を着かへて出づ。）

高綱　御坊を佛間へ招じたれば、やがて讀經も始まるであらう。そちも參つて回向いたせ。

子之介　はあ。

（高綱は奥に入る。子之介もつゞいて入らんとする時、下のかたより佐々木小太郎定重、廿餘歲出づ。）

定重　こりや馬飼のもの、叔父上はお宿にござるか。

子之介　はい。唯今高野の御出家様がお越しなされて、御佛間へ御案内なされました。

定重　おゝ、左樣であつたか、御佛事の場所へみだりに推參

も如何。兎もかくも定重まゐりしと申上げてくりやれ。

子之介　かしこまりました。（奥に入る。）

定重　（ひとり言。）合點のゆかぬはこの頃の叔父上のありさまぢや。鎌倉殿上洛の人數も早や美濃路まで進まれたと聞くに、御出迎ひの用意もなく、そしらぬ顏して日を送らるゝは、抑もいかなる次第であらうか。（奥にて鉦の音きこゆ。）おゝ、讀經ももはや始まつたと見ゆるな。

（奥より薄衣出づ。）

薄衣　小太郎どの、お越しなされましたか。

定重　おゝ、薄衣どの。叔父上は佛間にござるさうな。

薄衣　はい。先づ奥へお通りなされませ。

定重　いや、けふは少しく心もせけば、こゝにて暫時相待ち申さう。

薄衣　ではそれへお掛けくださりませ。

（定重は上のかたの床几にかゝる。薄衣は梅の樹に倚りて立つ。）

定重　叔父上の御機嫌はこのごろ何うでござるな。

薄衣　別にかうといふこともござりませぬが、兎かくにお氣が塞々しくなつて……。瑣細なことにもおむづかりなされて……。そばにゐる者もはら〳〵するやうな。

定重　御病氣ともみえませぬか。

薄衣　御病氣のやうでもござりませぬが……。（眉をひそむ。）

定重　はてなう。（かんがへてゐる。）

高綱　（奥より出づ。）小太郎、まゐつたか。

（定重は起つて床几をゆづる。高綱は床几に腰をかける。定重は薄衣にすゝめられて、下のかたの床几にかゝる。）

定重　早速でござりまするが、將軍御上洛の同勢はもはや美濃路まで到着とうけたまはる。やがては當國へ進ませらるゝ御日取りでござれば、叔父上にも御出迎ひの御用意いかゞでござりさするな。（高綱答へず。定重はその氣色をうかゞひて。）父は昨夜すでに出張いたしてござる。

（高綱はなほ答へず。）その、砌、父が申しまするには、其方は叔父上のおん供して、今夕刻よりつゞいて出發いたせと……。

高綱　（不興げに。）兄上が左樣申し殘されたか。

定重　はあ。

高綱　其方は父の指圖にまかせて、ゆきたくば勝手にゆけ。叔父は忌ぢや。（定重おどろく。）高綱は行かぬぞ。

薄衣　このあひだからお勸め申して居りまするに、なぜ御出迎ひはなされませぬ。將軍の御上洛には途中までお出迎

ひ申すが武家の習。なう、小太郎どの。

定重 鎌倉の將軍頼朝公がはじめての御上洛、武藏相模は申すにおよばす、海道の大小名はすべておん供に加はるなかに、叔父上ばかりが御不承知とは……。

高綱 おゝ、不承知ちやよ。鎌倉の將軍がなんぢや。頼朝がなんぢや。あの大がたりの大嘘つきめが……。

薄衣 あ、もし、うか／＼とそのやうなこと……。

定重 萬一餘人の耳に入りましたら……。

高綱 おそろしいと申すのか。（あざ笑ふ。）嘘つきなればこそ嘘つきと云うたがなぜ悪い。こりやよう聞け。石橋山のたゝかひ敗れて、頼朝めは散々の體たらく。嘴合ひに負けた癩犬のやうに、尻尾をまいて遁々の體で逃げまはる。暗さは暗し、雨はふる。木の根や岩角につまづいて顚つまろびつ、泥まぶれになつて遁ひあるくそのざまは……。わはゝゝゝゝ。さりとてわれに取つては讐代の主君ぢや。命を捨てゝもその難儀を救はねばならぬと、高綱かけ付けて扶け起し、それがしおん名をたまはりて防ぎ戦ふあひだ、君には疾く／＼落ちさせたまへと云へば、頼朝めは拜まぬばかりによろこんで、おゝ、わが身がはりに立つてくるゝか、佐々木は日本一の大忠臣ぢや。われもし生きて天下を取らんには、その恩賞として日本の半分をわかち取らすぞと、諸人の聞く前でたしかに誓うた。

定重 右様の儀はかねて父よりうけたまはつて居りまする。そのをりに叔父上がおん身代りに相立たずば、頼朝公の御運も危かつたかとも存じられまする。

高綱 高綱が源頼朝と名乗つて……おもへば馬鹿な。大童となつて必死にたゝかふ間に、頼朝めは杉山まで逃げ込んだ。高綱も幸ひに命をまつたうした。つゞいては宇治川先陣の功名、それだけでも二ケ國三ケ國の値はあらう。さて頼朝めは思ひのまゝに世をとつて、天下の大將軍と仰がれながら、命の親の高綱にはなにほどの恩賞をくれたと思ふぞ。日本の半分は云ふもおろか、四半分の又その四半分にも足らぬ捨扶持をくれたばかりで、おのれはあつぱれ主人顔ぢや。征夷大將軍、源氏の棟梁とか勿體らしく名乗るものが、恩をわすれ、約束を破つてすむと思ふか。

定重 一應御もつともではござりまするが……。（返事に困つてゐる。）

高綱 勿論、高綱もだまつては居らぬ。石橋山の御約束はも

はや御忘れなされたかと、たび／＼催促に及ぶといへども、四の五の云うて埒があかぬ。それにまた土肥の、安達の、三浦のといふ腰拔どもが、かしこ振つた面をして、そのやうなことを申すは第一に不忠ぢやの、やれ君命には背くなの、長いものには卷かれろのと、理を非にまげて意見をし居る。（定重をみて。）其方の父なども同じくその腰拔け仲間ぢや。えゝ、ばか／＼しい。主人は約束にそむく大嘘つき、まはりの奴儕はへつらひ武士や臆病者。右を見ても左をみても、癲に障ることばかりが疊まつて來るわ。

（高綱は立つて梅の枝をねぢ折り、落花微塵に引きちぎつて地に投げ付ける。）

定重 われ／＼若輩者が押して申上げましたら、定めてお叱りもござりませうが、今もむかしも道理ばかりでは濟まぬ世の中でござりまする。たとひ叔父上に十分の道理がござりませうとも、いまさら鎌倉の將軍を相手取つて、理非を爭ふなどとは及ばぬこと。どのやうな御不足がござりませうとも、堪忍あそばすがお家の爲、このたびは何とぞそれがしをお供に連れられて、まげて國境まで御出迎ひを……。

高綱 最前も申した通り、ゆきたくば其方ひとりで行け。

定重 くどうも申すやうなれど、お家を大事と思召されて……。

高綱 えゝ、面倒な。家がなんぢや。高綱がけふ限りで家を捨てたらなんとする。

薄衣 え、もし、父上様……。（思はず縋らんとす。）

高綱 （ぢつと娘の顏をみたるが、又つき退ける。）こんな馬鹿々々しい世のなかに、生きてゐる奴の氣が知れぬわ。

定重 では、どうあつても御出迎ひには……。

高綱 まだわからぬか。くどい奴ぢやなう。

（高綱は奥に入る。あとにふたりは呆て見あはせる。）

薄衣 今更ならねど父上のはげしい御氣性、一旦かうと云ひ出されたら、容易に思ひ返しはなされまい。困つたことでござりまするなう。

定重 このたび將軍御上洛には海道筋の大小名、いづれも人數をひき連れて、路次の警固をつかまつるとあるに、叔父上のみ御不參とこれあつては、後日の御咎は逃れまい。まして將軍のお側には、日ごろより佐々木一家とは仲違ひの梶原父子もひかへて居れば、この機に乘じていかなる讒言を申立てんも測られず、油斷せば家の大事……。（思

案して。）兎もかくも一旦は立歸り、出發の用意をとのへて、再びお迎ひにまゐるでござらう。

薄衣　もし父上が飽までも御不承知と仰せられたら……。

定重　是非に及ばず、それがし一人にてまゐるまでぢや。萬一叔父上が御不興を蒙るとも、それがし父子が申しなだめて、無事を計るが一族のよしみ……。（詞優しく。）かならず御心配あるな。

薄衣　なにとぞ宜しくたのみまする。

定重　さらば重ねて……薄衣どの。

薄衣　御出發の折には今一度お立寄り下さりませ。

定重　無駄とは思へどお誘ひにまゐらう。

（ふたりは會釋して、定重は下のかたに入る。薄衣はあとを見送りて思案顔にたゝずみしが、これも思ひ直して奥に入る。下のかたより子之助の姉おみの、廿二三歳の農家の娘、旅姿にて出づ。）

おみの　（あたりを窺ひて。）子之介は厩にゐると御門で教へられたが、はて何處へ行つたことであらう。

（奥より子之介出づ。）

おみの　おゝ、弟……。

子之介　姉様か。（なつかしげに寄る。）ようたづねて來てくだされた。

おみの　このごろは時候もおひ〳〵に惡うなつて來たが、別に變ることもないかや。

子之介　はい。幸ひに達者で暮してをりまする。

おみの　それでわたしも安心しました。

子之介　けふは月こそ遠へ、父様の御命日で、今まで奥で御回向をして來ました。

おみの　奥で……。（かんがへて。）そなたひとりで御回向をしてゐやつたのか。

子之介　殿さまと御一緒に……。

おみの　殿様も御一緒に……。人間ひとりを慘たらしう殺して置いて、回向さへすれば、罪が消ゆるかなう。（冷笑ふ。）

子之介　（怒はしげに。）姉様。お前はやつぱり殿様を恨んでゐるのぢやな。

おみの　（左右を見まはす。）これ、そこらに人はゐぬか。（子之介うなづく。）恨むが無理か、積つてもみやれ。父様は正直律義のお生れで、日ごろから露ほども曲つたことはせられなんだに、よい人にも惡い報いが來て、十年以前野洲の河原で何者にか斬り殺され、奪いてゐた馬は

ぬすまれた。その時わたしはまだ十三、そなたは十一で碌々に勘心もつかず、唯おろ〳〵と途方にくれて、姉弟手を取つて泣いてゐた。（なみだを拭ふ。子之介もうつむいて聽く。）かたきは誰か知らねども、見つけ次第に唯は置くまいと、歎きのなかに胸に刻んで今まで月日を送るうちに、神佛のひきあはせか、かたきは知れた……。（再び左右をうかゞひて。）かたきは佐々木高綱とおのれの口から名乘つて來た。

子之介　十年以前野洲の河原で馬士を殺したはわが仕業と、あからさまに名乘つて出て、ゆかりのものを探し求め、むかしの罪を償ふために、あつく扶持して取らせると、御領主様からお觸れが出たときには、夢かとばかりに驚きました。

おみの　おどろきと悲みと喜びとが一つになつて、一旦は思案にも惑うたが、かたきが我から名乘つて出たこそ幸ひ、その屋敷へ入り込んで、隙もあらば恨みの刃をかたきの胸に刺し透さうと、約束したを忘れはせまい。こゝへ奉公住みして足かけ三月のあひだに、討つべき隙はなかつたか。そのたよりが聞きたさに、けふはわざ〳〵尋ねて來ました。

子之介　隙もあらばかたきを討たうと、刃を呑んで住み込みましたが、あくまで前非を悔いた佐々木どの、この子之介のまへに兩手を突いて、ゆるしてくれとお詫びなされた。そのまごころが面にあらはれて……。

おみの　討つべきこゝろも鈍つたか。えゝ、云ひ甲斐のない卑怯者、臆病者……。最前もいふ通り、罪もない人間ひとり殺して置いて、わびて濟まうか。回向して濟まうか。それで堪忍がなるほどなら、けふまで泣いて暮らしはせぬ。廿歳を越しても歯を染めぬ姉の覺悟をなんと見た。姉弟が心ひとつにして、馬盜人のかたきの奴めを……。

子之介　もし。（聲高しと制する。）

おみの　そなたは疾うからこゝに住み込んで、屋敷の案内も知つてゐやらう。今夜にも姉を手びきして……。これ、黙つてゐるのは不承知か、但しは今更おくれが出たか。

子之介　むかしの罪を後悔して、毎月二日を命日に、供奉供養をかゝさず營んでくださる殿様を、いまさら執念く恨むのは……。もし、姉様。父様の死んだのは是非もない災難ぢやと……。

おみの　なに。（屹となる。）

子之介　どうぞ諦めてくださりませ。

（おみのは呆れた體にて弟の顔をぢつと眺めてゐたりしが、やがてわつと地に泣き伏す。）

子之介　もし、姉様。（立寄つて取縋る。）

おみの　（狂ふがごとくに突き退ける。）えゝ、寄るな、寄るな。現在の親のかたきを眼の前に置きながら、おめおめと見てゐるやうな不孝ものに、姉と呼ばるゝおぼえはない。

子之介　たとひ佐々木殿を討つたとて、死んだ父さまが返りませうか。よしない罪を作らうよりも……。

おみの　えゝ、卑怯者……不孝者……。もうこの上はそなたは鋼まぬ。なんの相手が武士ぢやとて怖ろしいことがあらうか。かたきは妾ひとりで見事に討つてみせう。（おみのはかゝへたる絲撚をときて、山刀をとりだす。）子之介おどろきておさへんとす。

おみの　（振拂ひて。）えゝ、邪魔するな。放しや、放しや。（おみのは突退けて奥へ駈けゆかんとするを、子之介はあわてゝ遮る。）

子之介　いかにお急きなされても、女ひとりで奥へ踏み込まうなどとは狂氣の沙汰……。もし仕損じたらなんとなさる。まあ、お待ちなされませ。

おみの　とめるな、放しや。

子之介　でも、このまゝに遁ることは……。（おみのは又ふり切つて行かんとするを、子之介は必死となりて縋りとめ、無理に鹿のかげへ連込む。下のかたより佐々木小太郎定重、花やかなる鎧をつけて弓を持ち、家來幾人を引連れて出づ。）

定重　（家來を見かへりて。）先刻の穢子では、叔父上にもまだ御支度はなされまい。それがし參つておすゝめ申す間、其方どもはこれに控へてをれ。

家來　はあ。

（定重は奥へゆかんとする時、奥より佐々木高綱は頭巾を切りたる有髪の僧形。直垂の袴をくゝりて脛巾をはきたる旅委にて笠を打ち出づ。あとより海衣、與一、六郎、小萬等は打凋れて送り出づ。）

定重　（おどろく。）や、叔父上には……。

高綱　弓矢は折つた。太刀も捨てた。熊谷蓮生坊の二の舞ぢや。（笑ふ。）

定重　これは又思ひもよらぬこと、佐々木四郎高綱と日本中にきこえたる弓取が、にはかに浮世を捨てられたは……。

高綱　戀しい浮世ならばなんで捨てよう。いつはり者が上に

たつ世の中、へつらひ武士がはびこる世の中、けがれた世の中、面白からぬ世の中、このやうな世の中は高綱の住むべきところでない。

定重　では、この世の中を見限つて……。

高綱　（罵るやうに。）おゝ、この世の中に愛想がつきたわ。

藤衣　幾たびおとゞめ申しても、お聞き入れがないばかりか、高野の聖のおん供して、これからすぐにお立ちとは、情ないことでござりまする。

定重　これからすぐに高野へ山入りとな。

與一　折も折とて高野の聖が、こゝへお立寄りなされたので、にはかに出家の思召、さることに夢のやうに思はれまする。

六郎　さなきだに世の中が面白からぬと仰せられてゐたところへ、恰も將軍の御上洛、その御出迎ひを強ひられる蒼蠅さに、いつそ武士を捨つるとのお詞でござりまする。

高綱　委細は今聞く通りぢや。かならず騒ぐな、おどろくな。兄上に逢うたらばそのおもむきを確と申傳へてくりやれ。

（定重茫然。奥より智山出づ。）

智山　方々のおどろきも嘆きももつともぢや。われ等も一應は頭をかたむけたが、勇猛直前は勇士の本意、たとへば風を剪つて飛ぶ矢のごとくで、おのれが向はんとするところへ向うよりほかはござるまい。（風の音して梅の花散る。）おゝ、花がちる。佐々木どのにはこれをなんと見らるゝ。

高綱　（うち笑む。）西行のやうな涙もろい男なら、無常を感じて泣くでござらう。

智山　おん身の悟は……。

高綱　高綱に悟はござらぬ。

定重　悟らずして世を捨てらるゝは……。

高綱　こんな世の中にうろ〳〵してゐるのが、忌々しいからぢや。

智山　それも一種の悟であらうよ。はゝゝゝゝ。

高綱　はゝゝゝゝ。（底にむかひて）生月をこれへひけ。

（子之助は生月を率いて出づ。）

子之介　殿様。委細はあれで伺ひました。

高綱　聞いたとあらば重ねて云ふまい。これより聖のおん供して、高野へまゐる。頭をそり剃てば高綱も法師ぢや。其方が父紀之介の後生安樂を祷るであらうぞ。

子之介　ありがたうござりまする。（馬の口を取る。）さあ、お召しなされませ。

高綱　いや、今からは聖の御弟子ぢや。（智山にむかひ。）師の御坊には鞍に召しませ。われ等が車匿童子となり申さう。

智山　鎌倉の將軍にも頭をさげぬ佐々木殿が搜法師の馬の口を取らるゝか。さりとは面白い。しからば御免。（馬に乘る。）

（高綱は馬の口をとりて行かんとす。薄衣、小冬、與一、六郎、左右より走せ寄り、無言にて袂にすがる。）

高綱　薄衣は小太郎といひなづけの仲ぢや。やがては祝言して睦じう暮せ。與一そのほかも堅固であれ。やあ、小太郎。

定重　はあ。（進み寄る。）

高綱　高綱一家のあとをたのむぞ。

定重　委細承知つかまつりました。

高綱　よし。（取られし袂をふりきつて。）さらば……。

（行かんとする時、鹿のかげよりおみのは山刀をぬき持ちて走り出づ。）

おみの　父様のかたき……。（切つてかゝる。）

高綱　（身をかはしてその手をとらへ。）誰ぢや。（顔をみて。）

おゝ、子之介の姉か。（微笑みながら突きはなす。おみの倒れる。）こゝにも悟られぬ人があるなう。

智山　多の日のくれぬうちに大澤の宿まで。

高綱　はあ。

（高綱は馬の口を取りてゆく。皆々あとを見送る。おみのは又起ちあがりて行かんとするを、子之介は抱きとめる。三井寺の鐘の音きこゆ。）

——幕——

俳諧師

登場人物

俳諧師鬼貫
路通
鬼貫の娘お妙
左官の女房お留

元祿の末年、師走の雪ふる夕暮。浪花の町はづれ、俳諧師鬼貫のわび住居。軒かたむき緣朽ちたる破ら家にて、上の方には雪にたわみたる竹數あり。下の方の入口には低き竹垣、小さき枝折戸あり。となりは墓場の心にて、矢はり低き竹垣をへだてゝ其内に雪の積りたる石塔又は卒塔婆などみゆ。雪しづかに降る。寺の木魚の音きこゆ。

（下の方より近所の女房お留、竹の子笠をかぶりて出づ。）

お留　あゝ、よく降ることだ。寒い、寒い。（枝折戸をあけて犀をかける。）もし、御めんなさい。お留守ですか。

お妙　はい、はい。

（奥より鬼貫の娘お妙、十七八歳の美しき娘、やつれたる姿にて、煤けたる行燈を點して出づ。）

お妙　おや、おかみさん。まあ、どうぞおあがり下さい。

お留　なに、こゝでいゝんですよ。（笠をぬぎて緣に腰をかける。）寒いぢやありませんか。

お妙　ほんたうにお寒いことでございます。（衣を見る。）今夜も積ることでございませう。

お留　二日も降りつゞいた上に、まだ積られてはまつたく遣切れませんね。年の暮に斯う毎日降られては、どこでも隨分困ることでせうよ。

お妙　なにしろ、おあがりなさいませんか。そこはお寒うございますから。

（云ひながら下の方の爐を見かへれば、爐には火の氣がないので、お妙は困つた顔をしてゐる。）

お留　（それと察して。）いえ、もうお構ひなさるな。内の人もこの寒いので、持病の癇氣が起つたとか云つて、きの

ふも一昨日も仕事を休んでゐたのですけれど、もう數へ日になつて來て、お出入先から毎日の催促があるので、今日はたうとう朝から仕事に出て行つたんですよ。

お妙　この降るのに、まあ。

お留　尤も家のなかの繕ひ仕事ですから、雪が降つても出來るには出來るんですがね。それでも左官といふ商賣は辛いものだと滾し拔いてゐるんですよ。そりやまあ寒いときに泥いぢりをするんですから、どうで樂な仕事ぢやありませんけれど……。

お妙（身にしみるやうに。）そりや全くでございますわねえ。

お留　さう云つても、我慢して稼いで貰はなければ、今日が過されませんからねえ。こちらのお父さんは今日はお休みですか。

お妙　いゝえ、今もおつしやる通り、やつぱり我慢して出て貰はなければなりませんので、今朝から稼ぎに出かけましたが、この雪では嘸ぞ難儀であらうと案じてをります。

お留　このお天氣ではほんたうにお困りでせうねえ。その代りにこちらの御商賣なぞは、かういふ日の方が却つて可いかもしれませんよ。

お妙（愁はしげに。）どうでございませうか。

お留　なにしろ、もう歸つてお出でなさるだらうから、早く火でも熾して置いてあげたら何うです。外は隨分寒うございますよ。

お妙　さうでございませうねえ。（再び爐の方を見かへる。）

お留（それを察したやうに又うなづく。）いゝえ、どこでも焚物には困るんですよ。この頃のやうに炭や薪が高くなつては、その日暮し同樣の者はまつたく凌げません。それで、實はね。（聲を低めながら墓場を指さす。）わたしもあすこへ焚物を見つけに來たんですよ。

お妙　あすこへ……。（伸上りてのぞく。）

お留　あのお墓の古い塔婆を少し貰はうと思つてね。

お妙　お寺で臭れますかしら。

お留（笑ふ。）臭れるもんですか。どうで臭れないに決まつてゐるから、默つて貰つていくんですよ。

お妙　まあ。

お留　だつて、お前さん。さうでもしなければ、この大雪の日に凍え死んでしまふぢやありませんか。佛樣だつて大目に見てくれますわ。

お妙　でも、まさかそんなことは……。

お留　まあ、默つておいでなさい。こゝの家へも持つて來てあげますから。

（お留は枝折戸の外に出て、あたりを見まはしながら生垣を押破つて墓場に忍び入るを、お妙は緣に立ちて不安らしく眺めてゐる。やがてお留は、新しいのと古いのとを取りまぜて澤山の塔婆を引つかゝへて出で、緣先へ引返して來る。）

お留　ねえ、お前さん。これだけあれば一時の凌ぎはつくと云ふものですわね。雪で濕つてゐるかもしれないが、兎も角もこれだけ置いて行きませうよ。

（お留は塔婆の雪を拂ひながら、その幾本かを緣に置く。お妙はやはり不安らしく眺めてゐる。）

お留　こちらなんぞはすぐ隣なんだから、焚物に困つたらいつでも斯うなさいよ。

お妙　でも、おかみさん。

お留　まあ可いから、お父さんの歸るまでに、早く暖かい火でもこしらへて置いておあげなさいよ。どれ、わたしも早く歸りませう。まあ、御覽なさい。些との間に又積りましたよ。

（笠を持ちて起ち上る。）

お妙　氣をつけておいでなさい。

お留　はい、御免なさい。おゝ、降る、降る。

（お留は笠をかぶりて塔婆をかゝへ、挨拶してゆきかゝる時、上の方の竹藪の竹が二三本、凄まじい音して折れる。）

お留（驚いて見かへる。）おや、竹が折れましたよ。

お妙　さつきから撓んで居りましたが、たうとう折れたとみえます。

お留　この雪ではたまりますまいよ。わたしの家なんぞも小さいから、うつかりすると壓潰されるかも知れない。ははゝゝゝゝ。

（お留は笠を傾けて去る。ゆふぐれの鐘きこゆ。）

お妙　あのおかみさんはお墓からこんなものを持つて來て……。（塔婆を見る。）物と行つて歸して來ようかしら。（起ちかけて又躊躇する。）あゝ、雪が降る。お父さまはさぞお寒いことであらう。

（お妙はじつと思案の末、塔婆にむかひて合掌し、やがて思ひ切つて爐の側へかゝへて行き、それを爐に折りくべて燈石の火を打つ。塔婆は燃りて白き煙がうづまき隱

る。表の雪は降りやまず。下の方より俳諧師鬼貫、四十餘歳、導引のこしらへ、頭巾をかぶりて破れたる傘をさし、足駄をはきてとぼ〳〵と歸り來る。お妙は透しみて緣に駈け出る。)

お妙　おゝ。お父さま。お歸りでございましたか。

鬼貫　どうもよく降ることだな。

お妙　さぞお寒かつたでございませう。

(お妙は手つだひて、鬼貫は傘をすぼめ、頭巾をねぎ、からだの雪を拂ひて内にあがる。)

お妙　朝から少しも止まないので、お寒くもあらうし、お困りでもあらうと、案じ暮してをりました。

鬼貫　(炉のそばに來る。)おゝ、爐の火が暖かさうに燃えてゐるな。きのふけふの大雪、外に出てゐるものも難儀だが、内にゐるものも難儀、殊に今朝から焚物は無し、内でもさぞ寒がつてゐるだらうと、おれも内を案じてゐた。

お妙　この寒いのに焚付はなし、お父さまがお歸りになつたらどうしようかと思つて居りますと、あの左官のおかみさんが……。(少もしく云ひ淀みて。)これを持つて來てくれたのでございます。

鬼貫　内に火のあるのは不思議だと思つてゐたが……。あゝ、これは塔婆ではないか。

お妙　はい。(もじ〳〵してゐる。)

鬼貫　(急に顔を陰らせる。)これを左官のおかみさんがくれたのか。

お妙　はい。

鬼貫　おまへが自分で取つて來たのではあるまいな。

お妙　(あわてゝ。)まつたくあのおかみさんが取つて來てくれたのでございます。わたくしもどうしようかと思つたのでございますけれど……。(涙ぐむ。)お父様がさぞお寒からうと存じまして……。

鬼貫　さうか。(歎息する。)

お妙　どうぞ御勘弁なすつて下さいまし。(手をつく。)

鬼貫　今更叱つても仕方があるまい。まあ、湯でも沸す支度でもしてくれ。(やゝ穏かに。)こんなことを再びするなよ。

お妙　はい。恐れ入りました。

(お妙は眼をふいて、湯を沸かす支度をする。鬼貫はしばらく爐の火を眺めてゐる。)

鬼貫　お妙。

お妙　はい。

鬼貫　米はなかつたな。

お妙　(淚りながら。)はい。

鬼貫　(さびしく笑ふ。)いや、聞くまでもない。米櫃に一粒の米もないことは今朝から知つてゐたのだ。おれもそれを知つてゐるから、今日もこの大雪のなかを一生懸命に歩いたよ。(袂より笛を出す。)この笛を吹いて、大阪の町中を……。ふだんはおれの嫌ひな色町の方角まで、根よく流してあるいたが、馴染の深いものはやつぱり駄目だ。どこでも呼んでくれてがない。

お妙　(歎息する。)さうでございませうねえ。

鬼貫　それでも一軒の小さい米屋でよんでくれたので、隙居らしい老人の腰を揉んで、二十文の錢を貰つて來た。

お妙　(ほつとして。)それはよろしうございました。

鬼貫　それからもう一軒、質屋に呼び込まれて二十文、あはせて四十文がけふ一日の稼ぎだ。(財布より錢を出してみゝせる。)

お妙　それでもまあ結構でございました。

鬼貫　(又もや寂しく笑ふ。)結構かもしれない。今の身の上では四十文の錢でも尊い。これがなければ親子二人が飢死だからな。

お妙　まつたく尊いのでございます。(錢を財布に入れて押しいたゞく。)

鬼貫　いや、飢死の方がましかも知れない。おれも以前は大和郡山の藩中で、輕いながらも武家奉公をした身の上だ。若い時から俳諧がすきで、窮屈な武家奉公がどうも面白くないと思つてゐるうちに、おまへが十三の時に女房が死んだ。それから思ひ切つて武士を捨て、雖いお前の手をひいて、すみ馴れた郡山の土地を離れる時は、おれも流石にさびしいやうな心持がしないでもなかつた。「笠とりて跡ちからなや春の雨」……それからこの大坂へ出て來たが、好きな俳諧を弄んでゐるばかりでは迚も世渡りの道が立たないので、思ひ付いた導引按摩治、これならば兎もかくも親子の口糊ぎはならうと、初めは自分の家に看板をかけて見たが、ひとりも療治をたのみに來るものがないので、仕方が無しに按摩の笛を吹いて、毎日町中を流してあるくのも、かぞへて見るともう足かけ五年になる。家財も資類もみな賣り盡して、殘つてゐるものは親子二人のからだばかりだ。

お妙　(慰めるやうに。)その不足勝のあひだにも、俳諧の道に心をかたむけて、月雪花を樂むのが風流の極意ではご

ざいませんか。

鬼貫（うなづく。）それはおれも知つてゐる。

お妙　清貧を樂むとか、ふだんから仰しやるのは、こゝのことではございませんか。

鬼貫　清貧を樂む……。（みづから嘲るやうに。）おれら今まではさう思つてゐた。さう思へばこそ家代々の祿をすてゝ、自分の好きな俳諧師にもなつたのだ。しかし今のおれ達の身の上は、清貧などといふことを通り越して、あんまり慘め過ぎるではないか。月雪花を樂む風流の極意もこの世に生きてゐればこそで、おれ達はもう生命があぶない。おれ達はその日その日の糧にも困つてゐる。あしたの命もおぼつかないほどに飢に迫つてゐる。むかしの鬼貫ならば、この雪の日には是非とも一句あるべきところだが、今日の鬼貫は眼も俳諧もあらばこそ、どうしたら今夜の米代を稼げるか、あしたの薪代を稼げるか、どうしたら親子ふたりの露命をつなげるかと、唯そればかりに屈託しながら、大雪に埋もれた師走の町を一日さまよひ歩いてゐたのだ。大和も寒いところであつたが、淚花の多も身にしみるな。

（お妙はうつむきて悲しげに聽きゐたるが、やがて湯の沸きたるに心づきて、茶碗につぎて父にすゝめる。鬼貫は徐かに湯をのみて又考へる。）

鬼貫　おゝ、さうだ。たしか去年の暮であつた。やつぱりこんな寒い日であつたが、おれはその行燈の灯をじつと眺めてゐるうちに、つい一句浮んだ。「ともしびの花に寒待つ庵かな」――その頃はおれの心にもまだ餘裕があつて、春を待つといふ樂みがあつたと見える。その樂みも今は消えた。

お妙　え。

（お妙はいよ〳〵悲しげに父の顏を見つめる。鬼貫はうつむきて淵息をつく。雪風の音して、竹藪の竹二三本又もや折れる。その音に鬼貫は顏をあげて庭を見かへる。）

鬼貫　竹が折れたな。

お妙　さつきからたび〳〵折れるやうでございます。

鬼貫　これほどの大雪に壓されては、強い竹も流石にたまるまい。堪へるだけは堪へても、積る重荷に壓潰されて、倒れるもある、折れるもある。（じつと思案して氣を換へる。）これお妙。今夜の米を買つて來なければなるまいな。

お妙　ほんにさうでございます。これからすぐに行つてまゐりませう。

鬼貫　油はどうだな。（行燈を見かへる。）いや、四十文の錢で色々の買物も出來まい。油が盡きたら雪あかりでも事は濟む。兎も角もその錢で米と青菜でも買つて來い。

お妙　はい、はい。

（お妙は財布を帶にはさみて起ち上り、奥より風呂敷を持ちて出づ。）

鬼貫　あゝ、いつまでも降ることか。日が暮れて路が惡い。氣をつけて行けよ。

お妙　はい。氣をつけてまゐります。

（お妙は父の破れ傘を持ち、着物の裾をからげて、素足にて雪のなかを行きかゝる。）

鬼貫　これ、素足では冷たからう。穿きにくからうが、おれの足駄を穿いてゆけ。

お妙（少し躊躇して。）何、すぐそこでございますから……。

鬼貫　すぐそこでも素足では堪るまい。構はずに穿いてゆけ。

お妙　では、拜借してまゐります。

（お妙は父の足駄をはき、傘をかたむけて下の方に立去る。雪風の音。鬼貫は立つて緣先より娘のうしろ影を見送りゐたるが、やがて行燈をよきところに直して、小さき古机を持出し、しづかに筆を執りて懷紙に何か書きはじめる。雪の音、太鼓の音。下の方より俳諧師路通、三十餘歲、乞食の姿にて破れたる蓑をまとひ、古手拭をかぶりて出づ。）

路通（門よりのぞく。）この雪の日に難澁いたすものでございます。どうぞお慈悲に一文遣つてください。

鬼貫（書きながら見かへる。）氣の毒だが難澁はお互ひの身の上で、一文の施しも出來ない。どこか外の家へ行つてくれ。

（云ひすてゝ鬼貫は矢はり書きつゞけてゐる。路通は伸びあがりて內を覗き、なにか考へながら下の方に立ち去る。鬼貫はやがて書き終りて筆を措き、叮嚀に紙をたゝみて机の上に置く。それより押入をあけて袋に入れたる脇差を取出し、鞘をはらひて行燈の灯に照し視るとき、下の方よりお妙は風呂敷包みをかゝへて歸り來り、門口より內をのぞきて俄にたちどまり、不安らしくうかゞひゐる。鬼貫は破れたる半屏風を逆に立てまはして、その蔭に這入る。その途端にお妙は傘も包みも投げ出して內へ駈けあがり、屏風を押倒して父の手に取りすがる。）

お妙（聲をふるはせる。）お父さま。どうなさるのでございます。

鬼貫　お妙。もう嚊つたのか。

お妙　こんな刃物を持つて、お前はどうなさるのでございます。

鬼貫　譯はそこに書いてある。それを讀めば判ることだ。

お妙　いゝえ、そんなものを讀んではゐられません。もし、お父さま。おまへは何で自害なさるのでございます。

鬼貫　叱つ、靜にしろ。

お妙　いゝえ、靜には出來ません。まあ、兎も角もその刃物をお渡しください。

（たがひに爭ふ間に、下の方より路通は再び出で來り、門口よりうかゞひゐる。お妙は一生懸命に父の手より刃物を奪ひとりて泣く。）

鬼貫　これ、靜にしろと云ふのに……。なるほど吃驚するのも道理だが、たとひ自害しないでも俺達はもう生きてはゐられない……。よく考へてみろ。さつきも云ふ通り、あしかけ五年の淺々に、わづかばかりの貯へは勿論、家財も殆ど賣りつくして、導引按摩治にまで身を落したが、それでも世渡りは出來ないで、先月から三度の飯も滿足に食つたことがない。これで幾日もつゞいたら、嬰子ふたりが抱きあつて飢死するより外はゐるまい。考へてみても怖ろしいことだ。

お妙　飢死するのが怖ろしさに、いつそ自害すると覺悟したら、なぜわたくしにも打ち明けて下さいません。お前に捨てゝ行かれたら、あとに殘つたわたくしは何うなると思ふのでございます。やつぱり飢死するより外は無いではございませんか。（泣く。）

鬼貫　いや、おまへと俺とは違ふ。お前はまだ若い身の上だ。いつそ自分一人ならば、どこへ奉公しても生きてゐられる。決して飢死するやうな心配はない。あの書置を人に見せれば、心ある人は憐れんでもくれるだらう。おれも好んで死にたくはない。それで今日まで我慢に我慢をして來たが、ほかの事とは譯が違つて、人間がどうしても食へないとなれば、死ぬよりほかに仕樣がない。生きたいと云つても生きてはゐられないのだ。判つたか。

お妙　いゝえ、どうしても死ぬほどならば、まだ生きてゆく道があらうかと存じます。唯今のお話をうかゞひますと、わたくしをお救ひ下さるために、お父さまが命をお捨てなさるやうに思はれまして、あんまり悲しうございます。わたくしはそんな不孝者になりたくはございません。かう云ふ時には、わたくしが死んでお父さまをお救ひ申さ

ねばなりません。

鬼貫　馬鹿なことを……。お前を殺してどうなるものか。

お妙　ほんたうに死ぬのではございません。唯今お父さまは何處へ奉公してもと仰しやいました。その奉公にまゐるのでございます。

鬼貫　奉公にゆく……。

お妙　はい。（決心したやうに涙を拭く。）奉公にまゐります。と云つて、お父さまに御不自由はさせません。わたくしに代つて朝夕のお世話を致すやうな、下女でも下男でもお雇ひ入れなすつて下さいまし。

鬼貫　その日の暮しに困る人間が下女や下男を置く。そんなことがどうして出來ると思ふのだ。（娘の肩に優しく手をかける。）おまへは少し取逆上せてゐる。まあ、まあ、おちついてよく考へるが可い。

お妙　（父の膝に手をかける。）もし、お父樣。わたくしは奉公にまゐりまして、お父樣に御不自由のないやうなお金を工面いたします。

鬼貫　むゝ。

（鬼貫は膝に落ちぬやうに考へながら、娘の顏をじつと觀る。お妙の眼からは涙が流れる。）

鬼貫　（俄に思ひ付いて。）あ、おまへは勤め奉公にでもゆく氣か。

お妙　はい。（父の膝に泣き伏す。）

鬼貫　（あわたゞしく。）いけない、それは不可ない。お前にそんなことをさせられるものか。おれは今まで唯の一度もそんなことを考へたことが無かつた。おれはそんな無慈悲ではないのだ。（娘の手を掴んで叱るやうに。）おまへはどうしてそんな馬鹿な、間違つた考へを起したのだ。おまへが自分ひとりで考へ出したのか、それとも誰かに智惠をつけられたのか。むゝ、あの左官のおかみさんに教へられたのか。大事の娘に勤め奉公をすゝめるなどとは、彼奴、思ひのほかの不埒な奴だ。

お妙　（父に縋る。）いゝえ、左官のおかみさんの知つたことではございません。誰に教へられたのでも無く、わたくしが不意と考へ付いたのでございます。

鬼貫　何日そんなことを考へたのだ。

お妙　けふの雪をながめながら、お父さまが外で嘸ぞ寒いおもひをしていらつしやるだらうと思ひまして……（泣く。）わたくしのやうなものでも勤め奉公に出ましたら、いくらか纏まつたお金も手に這入らうかと。不意と思ひ

つきましたその矢先へ、お父様が……（落ちたる脇差に眼をつける。）こんな覺悟をなさいましたので……。

鬼貫　いや、判つた。なるほどお前の容貌ならば、廓へ身をしづめて相當の金にもなるだらう。おれも樂が出來るかも知れない。併しそんなことがどうしてさせられるものか。

お妙　お許しはございませんか。

鬼貫（又もや激しく叱り付ける。）えゝ、念を押すまでもない。たとひ飢死をすればとて、わが子に遊女の勤めをさせるなどとほ、以ての外のことだ。これ、よく考へてみろ。おれはお前が可愛ければこそ、自分を殺してお前を生かさうとしてゐるのだ。そのお前を苦界に沈めて、俺がその金で樂々と生きてゐられるか。親の心、子知らずとはお前のことだ。あんまり腹が立つて涙も出ない。おれが率公しろと云つたのは、たとひ水仕率公にもしろ、眞直な正しい率公をしろと云つたのだ。おれは死んでもどうなつても構はない、せめてお前だけは人間らしく生かして遣りたいと、苦勞してゐる俺の心がわからないか。

お妙　それはよく判つて居りますけれども、わたくしはどうしてもお父様を見殺しにすることは出來ません。

鬼貫　どうしても身賣をするといふのか。（詰めよる。）

お妙（恐れるやうに。）では、わたくしは思ひ切つて身賣を止めませう。

鬼貫　むゝ、止めるか。それが當りまへだ。

お妙　その代りお父さまも……。死ぬのを止めて下さいまし。

（鬼貫は默つてゐる。）

お妙　もし、この通りでございます。（手をあはせる。）

（鬼貫は矢ぱり考へてゐる。）

お妙　これほどに申しても聽いてくださらなければ、お父様よりも先に、わたくしが寧そ死んでしまひます。

（お妙はそこにある脇差を取りて、緣先へ走り出る。鬼貫はおどろいて押へる。）

鬼貫　これ、飛んでもないことをするな。

お妙　いゝえ、死なせて下さいまし。

鬼貫　はて、判らない奴だ。

（二人はたがひに爭ふところへ、路通は枝折戸より入り來りて聲をかける。）

路通　あゝ、待つてくれ、待つてくれ。

（鬼貫とお妙はおどろいて見かへる。）

鬼貫（答めるやうに。）お前は誰だ。なにしに來た。

路通（笑ふ。）さつき來た物貫ひだよ。

鬼貫　物貫ひ……。

（路通は頬冠りを取る。）

鬼貫（透して視る。）や、路通か。

路通　久振りだな。

鬼貫　まつたく久振りだ。

路通　その久振りのお客様が來たのだ。まあ、おちついて話さうではないか。

（路通は緣に腰をかける。鬼貫は早くその刃物を納めろと娘に眼で知らせる。不意の客來にうろ〳〵してゐたお妙も一先づ刃物を鞘に納める。）

鬼貫（なつかしげに。）なにしろ、久しく逢はなかつた。そこは寒い。まあ、こつちへあがつてくれ。

お妙　むさ苦しうございますが、どうぞお通り下さいまし。

鬼貫（爐を指さす。）こゝには火がある。寒さ凌ぎに早くあたるが可い。

（お妙は立寄つて路通の蓑をぬがせ、その雪を拂つて遣る。）

路通　いや、構つてくださるな。（鬼貫に。）なまじひ暖かい火などにあたると、却つてあとが寒い。宿無しはこゝで澤山だ。併しこゝらも隨分積つたな。（庭を見まはし、そこに落ちたる傘と包みとに眼をつける。）や、こゝに色々拋り出してある。

（傘と包みとを拾ひて緣に置く。お妙は會釋して受取る。）

鬼貫（お妙に。）米を買つて來たのか。

お妙　はい。

鬼貫　丁度よい。青菜の芥でも焚いて、お客さまに御馳走しろよ。

お妙　はい、はい。

路通　それは何よりありがたい。久振りで御馳走にならうかな。

お妙　唯今すぐに支度を致します。（包みを持ちて奥に入る。）

（鬼貫は茶碗に湯を汲んで來て、路通のまへに置く。）

鬼貫　郡山で別れて以來だから、もう足かけ六年になる。そのあとはどうした。

路通　この通りだ。はゝゝゝゝ。

鬼貫　再び昔の姿になつたか。

路通　おれはこの姿で東海道の松原に寢てゐるところを、芭蕉の翁に見つけられて弟子の一人に取立てられたが、人

間並の生活はおれの性にあはないと見えて、師匠にさんざん叱られた上に、二三年前から再び元の宿無しだ。乞食を三日すれば忘られないと云ふが、まつたくこの方が氣樂でいゝやうだよ。

鬼貫　さうかなあ。(考へる。)それでも生きてゐられるかなあ。

路通　この通り生きてゐるのが論より證據だ。しかし俺はおれで、おまへに俺の眞似は出來ない。かうして平氣で生きてゐられるのは、この路通ばかりだらうな。

鬼貫　(感心したやうに。)さうかも知れない。

路通　おまへは斯うして渴をくれたが、おれは滅多にこんなものを飲んだことはない。喉が渴けばすぐにこれだ。(路通は庭の雪を手に抱つて飲む。)

鬼貫　腹の減ることはないか。

路通　あるな。一日に一度ぐらゐしか食はない時がある。方方の家の門に立つても一文の錢だつて容易に惠んでくれるものではない。現にこゝの家でも斷られたからな。(笑ふ。)

鬼貫　それはお前と知らなかつたからだ。堪忍してくれ。

路通　斷られるのは馴れてゐるから、さのみ驚きもしなかつたが、どうも聞覺えのある聲だと思つたから、また引返して來てみると、いや大變な驚ぎで、いくら無頓着のおれもこれには流石に驚いたよ。鬼貫といふほどの風流人が何うも無分別なことだな。

鬼貫　無分別と云はれても仕方がない。おれはもう切端詰つたのだ。

路通　それが無分別だといふのだ。切端詰つたと云つても、なんとか生きてゆく道もあるだらう。娘の方がおまへより些と利口のやうだ。

鬼貫　(少しく激して。)おれは自分の娘を賣つても生きてゐようとは思はないのだ。

路通　(笑ふ。)まあ、おちついて聽くがいゝ。誰がおまへの娘を賣れと云つた。おれはこの通りの獨り者だが、たとひ子供があつたにしても、その子供を賣飛ばして金にするといふ無慈悲な料簡にはなれさうもない。おまへの心は俺にもよく判つてゐるよ。

鬼貫　おまへも察してくれるか。

路通　むゝ、察してゐる。そこで、おまへも命を捨てず、娘も身を賣らず、無事安穩に生きてゐられる智惠を授けてやらうと思ふのだが、どうだ、おれの云ふことをきくか。

鬼貫　おれも死なず、娘も身を賣らず。(疑ぶやうに。)おまへにそんな智惠があるかな。

路通　あるから數へて遣らうといふのだ。一體おまへたち親子が死ぬるとか生きるとか騒いでゐるのも、つまりは食へないからのことだらう。

鬼貫　(うなづく。)まつたくその通りだ。よく〳〵のことだと思つてくれ。

路通　さあ、そこだ。おれは獨り者の上に、人間もほんたうに風流に出來てゐる。第一に乞食馴れてゐるから、一日に一度ぐらゐしか飯を食はないこともある。いや、その一度も滿足に食へないやうなこともある。それでも些つとも驚かないやうに仕込まれてゐるが、おまへ達は素人だ。唯の人間だ。腹の虫が意氣地なく出來てゐるから。一度も飯を食はせないとすぐにぐう〳〵泣き出すといふ始末だ。おれならこの境遇で平氣でもゐられるが、お前たちには迚もその辛抱は出來まい。おまへ達に取つては腹の減るぐらゐ怖ろしいことはあるまい。そこで、おれが飯を食へることを數へてやる。親子ふたりが滿足に三度の飯さへ食へたら申分はない筈だ。

鬼貫　それは勿論だ。おれだつて別に榮耀や榮華がしたいと望むわけではない。たゞ無事に生きてゐられゝばいゝのだ。

路通　それには斯うするのだ。よく見ろ。(路通は庭の雪の上に指にて書く。鬼貫は行燈を持ち出して、緣の上から覗く。)

鬼貫　(氣色を變へる。)なんだと思つたら濟んでもないことを……。貴樣はそれだから師匠にも破門されるのだ。痩せても枯れても俺も鬼貫だ。そんな馬鹿なことが出來ると思ふか。

路通　(平氣で。)それが惡いか。

鬼貫　善いか惡いか考へても判るではないか。實にどうも呆れた奴だ。そんな料簡だから貴樣は乞食の味が忘れられないのだ。もう貴樣とは口を利かないから、早く出て行け。

路通　(再び緣に腰をかける。)なにをそんなに怒るのだ。

鬼貫　えゝ、なんでもいゝから早く出て行け。さあ、出てゆけ。

(鬼貫は路通の腕をつかんで、緣より引卸さうとする。)

路通　まあ、待つてくれ、待つてくれ。

(鬼貫は緣より下りて路通を引出さうとする。路通は雪

のなかに倒れる。）

鬼貫　早くゆけ。宿無しの乞食野郎め。（茣を取つて路通に投げつける。路通は頭から茣をすつぽりと被せられて倒れながらに高く笑ふ。）

路通　はゝゝゝゝ。さう無暗に腹を立つなよ。さういふ馬鹿固い料簡だから、大事の命を安つぽく捨てる氣にもなるのだ。

鬼貫　なんだ。（縁にある傘を把つて振りあげる。）

路通　（茣から顔を出す。）まあ、待てといふのに……。おれの云ふことがおまへにはよく呑込めないのだ。

鬼貫　えゝ、ちやんと判つてゐる。おれに芭蕉翁の僞筆を書けといふのだ、僞物を作れといふのだ。

路通　さうだ。さうだ。（雪の上に起き上る。）おれの師匠の芭蕉翁の短册は、滅くも二分や三分には賣れる。相手によつては二兩も三兩も出すかも知れない。ところが、その直筆の短册といふものが世間に少い。

鬼貫　それは俺も知つてゐる。

路通　おまへは能筆だ。武家の出だけに、字をかくことは確かに巧い。そのおまへが芭蕉翁の僞筆をかけば、誰でも屹と一杯食はされる。それ、どうだ。短册を一枚かけば、少くも二分や一兩にはなる。おまへの導引按摩治とは些と譯が違ふだらうぜ。

鬼貫　たとひ幾らにならうとも、人の僞筆をかいて金儲けをする。そんな曲つたことが出來ると思ふか。

路通　それではおまへはやつぱり飢死をする積りか。それとも可愛い娘を賣るつもりか。（鬼貫は默つてゐる。）

路通　それともむざ〳〵娘を殺して、おまへも一緒に死ぬ積りか。（鬼貫は矢ぱり默つてゐる。）

路通　どう考へても俺の指圖に附いた方が利口らしいな。あゝ、あんまり饒舌つたので喉が渴いて來た。（庭の雪を掬つて再び飲む。）

鬼貫　幾度云つても同じことだ。おまへのやうな人間を相手にしてはゐられない。頼むから歸つてくれ。（縁にあがる。）

路通　頼まなくてももう歸るよ。宿無しでも寢るところは何處にかある。久振りで俳諧の話でもしようと思つたら、とんだ喧嘩になつてしまつた。はゝゝゝゝ。

鬼貫　（少し考へる。）むかしのお前なら、昔の俺なら、かう

〔綺堂戯曲集〕

昭和二十二年七月五日　印刷
昭和二十二年七月十日　發行

定價　金四拾八圓

著作者　岡本綺堂

發行者　東京都中央區日本橋通三丁目八番地　和田利彦

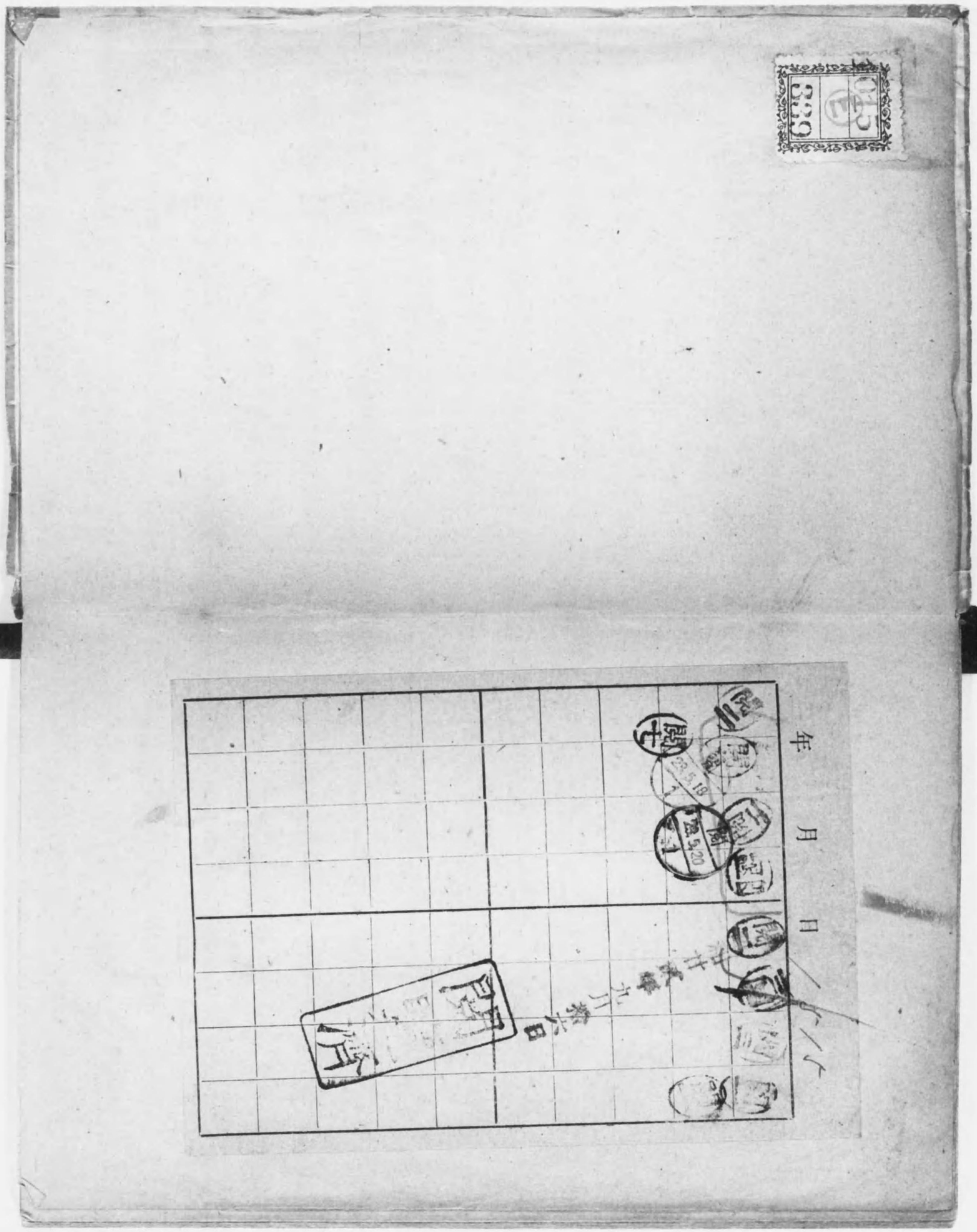
印刷者　東京都中央區日本橋通三丁目八番地　東陽印刷株式會社　古川篤夫

發行所　東京都中央區日本橋通三丁目八番地　株式會社　春陽堂

（會員番號A一一九〇三三）　電話（五一・四三七三　四八四八・四八四九）　日本橋

振替　東京一六一七番

（配給元　東京都千代田區神田淡路町二丁目九　日本出版配給株式會社）



終